



# PHOBIA

第四節

霜月音闇

イラスト 赤津豊

## キャラクター紹介

神無かんな

イオという人物の身体を使う第三人格。改竄の弾丸により作られた人格で曖昧な記憶に振り回される中、名を呼ぶたった一つの存在、斐文を守ることで自分であり続けようとしている。黒い魔人。

斐文ひふみ

神無を利用し、神を討とうと企む謎の女性。神の塔出身。改竄の弾丸を使い神無を生み出した張本人。青い魔人。

神威かむい

イオという人物の第二人格。過去に斐文と接触があったようだが詳細は不明。破壊衝動と暴力的感情として神無に影響を及ぼしている。

×一ぱついち

神の塔出身の謎の男。直接的な干渉は極力せず、斐文と神無に道を示している。何か別の目的があるようだが。

ヤハヴェ エルド所属の男。砂に埋まった斐文と神無を助けた

ことがきっかけで二人と知り合う。魔人を生身で撃退するほどの力を持つが、深手を負った状態で白い魔人と戦い命を落とした、筈だったが……。

アイ 第三期X No. 型式No.X | A 1。塔出身で神無抹殺の命を

受け、サウザントと共に二人の前に現れる。紫の魔人。謎の超速再生と神速移動を武器に戦うも青い魔人の魔弾によって倒される。その後覚醒するも、エルド所属のねくらにより倒され、現在、騎士団によって拘束されている。

騎士団の男 騎士団所属の男。斐文によって倒されたアイを

拘束、確保するも反撃を受ける。実力は未知数。

ねくら エルド所属のゴスロリ少女。大鎌を振り回し、投薬し

ながら戦う戦闘スタイルで紫の魔人とかしたアイを圧倒、撃破する。

騎士団の人影 騎士団の男に指示を出していた人影。騎士団

を束ねる立場にいる人物のようだが……。

暗い部屋、明かりを灯すように乱雑に置かれたTV達。

その真ん中。積み上げられたTV群に向かって佇む人影が一人。

真っ白い病院服に真っ白い髪、右手に鉄パイプを持った少女『斐文』。

画面の中で笑う自分を見つめ、斐文は小さく呟いた。

「誰？」

無造作に鉄パイプを振り上げ、画面に叩きつける。その瞬間一斉に部屋に木霊する画面に映された斐文たちの笑い声、その無邪気さに斐文は固く目を閉じ、全力で耳を塞いだ。そして、あらん限りの大声で己を奮い立たせると、片っ端からついているTVを鉄パイプで叩き潰していった。

砂嵐を映すTV。

放心状態の斐文は鉄パイプを投げ捨てるとそのTVの前に座り込み、チャンネルを変える。映し出される無音の笑顔達。

斐文はそれを知っている。

でも、記憶がない。

思い出でしかない。

「私は……誰？ 私は」

人は思い出で生きている。

いい思い出、楽しい思い出があれば、多少の苦痛にも耐えられる。

だから、お前はその、作られた思い出にすがって、生きろ。

「私、私、私……私って、何？」

#### 第四節 Junky Walker

「げほっ、がはっ！」

氣道を塞ぐ吐血にむせ返り、斐文は跳ね起きた。

「ここは……？」

頭を押さえ、うっすら目を開く。目に入ったのは無骨なコンクリートの冷たい床。見渡すとそこがコンクリートに囲まれた無機質な一室だということに気付く。口内に溜まった血を床に吐き捨てると、冷たい壁に寄りかかり、天井を見上げる。

嫌な夢を見た。

昔の記憶？

いや、違う、作られた思い出。

折れそうになるといつも支える、いい思い出。

それに安堵する自分。

吐き気がするわ。

視線を横に下ろすと、そこには投げ捨てた荷物が置いてあった。その中から点滴用のパックを取り出し、歯で噛み千切る。

これは生命の果実の失敗作。

肉体治癒力増強と組織の再生、血液補充までできる万能薬。代価は、寿命。有限から有限を生み出すんだから、当然減る。

でも、かまわない。一気にバックを煽り、液体をのどに流し込む。

もともと長生きするつもりなんてない。

私は、今。

今生きているのよ。

空になったバックを投げ捨て、ゆつくりと壁をすつて立ち上がる。

「神無……」

ゆつくりと歩みだす。

神無……私の切り札。

私を……。



「うむ、でかいな」

廃ビルの上で男が一人、腕を組んでまっすぐ見つめている。

その視線の先に佇むのは、黒い魔獣神無。黒い魔獣は一切動かず、天を見つめている。その様子を遠くの廃ビルから眺めながら、男はどうするか考えていた。

（外区にいる分には問題ない。だが、内区に入ってくるとなれば問題だ。騎士団に動く様子がないのは変だが、ここは俺たちギルドで何とかするしかないか）

「む〜」

男は腕を組みながら考え込む。

「ガイア、いや、ボス」

何者かが、階段を上がり、廃ビルの上にたどり着く。革のジャケットに革のパンツ、逆十字のネックレスといかれた色のギターを首から下げるサングラスの男。

「ビートか、どうだ、騎士団は？」

「まったくといって動く様子はねえな。俺たちで、やるか？」

『ビート』と呼ばれるサングラスの男は、腕を組む男『ガイア』の隣に立つとまっすぐ黒い魔獣を見つめる。

「やるったって、あのでかさだぜ。どうやるよ？」

「だな」

二人は苦笑いを浮かべ、両手を挙げる。

「お手上げ？ 早いんじゃない？ やつてもいないのにさ」

その声とともに赤いドレスの少女が廃ビルの不安定な手すりの上に舞い降りた。

「遅かったな、ねくら」

「どこで遊んでたんだ？ 血だらけじゃねえか」

「内緒」

ねくらはそういつて微笑むと、不安定な手すりに腰掛けた。

「あれも魔人？」

「ああ、そうだ、さっきまでは、魔人だった」

「魔人、だった？」

「ああ」

ため息交じりにガイアは話し出す。

「俺が来たときは、あれは二匹の魔人だった。巨大な黒黄色の魔人と真つ黒い魔人。二匹が戦って、真つ黒い魔人が勝つたと思つたところで、青い炎。気がついたらあの魔獣さ。弱つた片方を片付ける計画が。パァだ。さて、どうする？」

三人は苦笑いを浮かべ、黒い魔獣を見つめる。



瓦礫を掻き分け辿り着いた黒い魔獣の足元で、斐文は息を整える。手に持つ黒い銃から弾倉を抜き取る。中に入っている弾丸は一発。

(この一発で……)

弾倉を込め、黒い銃を額に当てる。

「さあ、行くわよ」

気合を入れ、斐文は物陰から飛び出した。

天蓋を見上げる黒い魔獣の尻尾から一気に背中に駆け上がり、銃身をスライドさせて撃鉄を上げると、両手で構え、頭に狙いをつける。

「起きて、神無！」

強い折りを込めて、引き金を引いた。その直後、強い力で斐文は何か掴まれ、宙を舞う。

「何であんたがここにいるんだ。『歌姫』」

首から下げた逆十字をきらめかせながら斐文を抱え、宙を舞うサングラスの男。そう、集まった三人のギルドメンバーの一人、ビート。一瞬の出来事に呆気にとられていた斐文だったが、すぐに我にかえり、暴れだす。

「なっ、くっ、この、離せ！」

そう言つて銃を振りかぶり、ビートの後頭部をグリップで思い切り殴る。

「だっ！」

ビートが怯み、その隙に斐文はビートを蹴り、黒い魔獣に飛び移る。

「神無！ 起きなさい！ 神無！」

斐文の呼びかけに、黒い魔獣は身体を仰け反らせ、大きく吼えた。

「オオオオオオオオオオオオ！」

大気が揺れ、塵ビルが倒壊し、瓦礫が崩れ、砂埃が吹き飛ぶ。

残響の消えない破壊の中心で、狂ったように黒い魔獣は暴れ出した。

「くっ、ててて」

後頭部を押さえ、魔獣を見上げるビート。黒い魔獣が視界に入った刹那、砂埃が舞い上がった。

「やべっ！」

咄嗟に危険を察知し、ビートは距離を取ろうとした、次の瞬間、薙ぎ払う尻尾が一瞬でビートを周辺のビル諸共薙ぎ払った。

「オオオオオオオオオオ！」

「神無！ 私の声が、聞こえないの！」

荒ぶる黒い装甲にしがみつきのながら、斐文は神無を呼び続ける。その声が届いているのかいないのか、黒い魔獣はより一層激しく暴れ出した。

「神無……」

叫ぶのを止めたその瞬間、掴んでいた装甲から手が離れた。

「あつ！ しまつ」

一瞬の油断、暴れる黒い魔獣の装甲にしがみついていた斐文は手を滑らし、そのまま宙に放り出された。

腕を振り上げる黒い魔獣。その赤い眼が斐文を捉える。斐文はその赤い眼の奥に激しい怒りを見た。

『何故、何故、何故、何故』

そんな声が聞こえる。

「違う、違うの、神無。私は」

『何故、嘘をつくの』

「違うの、私は！」

黒い巨腕が宙を舞う斐文めがけ降り下ろされる。まるで拒絶し突き放すように。

「やめやがれ！」

巨腕が叩きつけられるより早く、一人の人影が腕の下に潜り込み、降り下ろされる腕を弾き上げた。体勢を崩し、よろめく黒い魔獣の眼前に一人の男が飛び出す。赤いシャツに黒いジーンズ、黒い髪に黒い眼、そして、ひときわ目を引く両足のブーツ。鉄を何重にも巻き、倍以上に膨らんだブーツを振りかざし、宙を舞う男『ガイア』。ガイアは右足を振り上げると、黒い魔獣の顔目掛けて振り下ろした。

「オオオオオオオオオオオオ！」

黒い魔獣の唸りを地に伏しながら斐文は聞いていた。

「だって……私には、それしか、無いんだもの」

両の眼に涙を浮かべ、斐文は宙を見つめる。地面に叩きつけられた衝撃で、何本か骨にヒビが入ったらしく、腕を上げるだけで所々に激痛が走る。斐文は地面に横になったまま、静かに涙を流した。

「よお、どうした？」

聞き覚えのある声に、斐文は眼を開けた。寝ている頭の上に立つ逆光で塗りつぶされた一人の人影。人影はかがむと輪郭を取り戻し、斐文に微笑んだ。

「普通の女の子が来るようなところじゃねえぞ？ 斐文」

「や……ヤハヴェ……」

（何故？ 貴方は私が、たしかに、この手で）

ヤハヴェは笑いながらポケットを探り、一つのカプセルを取り出した。カプセル？ いや、違う、半透明な青い鉱石片、あ

れは、生命の果実。

「点滴のお礼だ。噛まずに飲み込め」

そう言つて、ヤハヴェエは生命の果実を斐文の口に放り込んだ。

「くっ、つっ……はぁ」

飲み込んだ果実が即効で身体に同調し、脈動するように骨を繋ぎ、傷を修復する。その痛みに斐文は一瞬顔を歪め、強ばりを大きいため息と共に吐き出す。

「観光にしちや派手だな。あの黒い魔獣、神無だろ？」

黒い魔獣を見上げてヤハヴェエは軽く笑う。斐文は痛みを堪えながら身体を起こすとふらつきながら立ち上がった。

「あんなにはしゃいで、まだまだガキだな。お前ははしゃがないのか？ 斐文、ここに来たかったんだろ？」

「そんな、気分じゃないわ」

髪をかきあげ、斐文は眉をひそめる。

(どうする、どうする)

斐文の頭の中はその考えでいっぱいだった。改竄の弾丸はもう一発もない。どうやって神無を止める？ どうやって、どうやって……言葉は届かない。嘘も。私にはもう、手段が。

「諦めるのか？」

心を読んだかのようなヤハヴェエの言葉に斐文は顔を上げる。

「私は……」

「何でも利用して此処まで来たんだろ？ だったらもつと利用しろよ。てめえじゃ何にも出来ねえんだからよお。使えるもの

は全部使えよ。過去も、未来もよお」

そう言つてヤハヴェエは口角を歪ませて笑う。違う、こいつは、ヤハヴェエじゃない。斐文は本能的にそう感じた。見た目、声、仕草はヤハヴェエそのものだが、何かが根本的に違う。

でも、そうだ。

そのとおりだ。

私には何もない。

だから、何かを利用しなきゃ。

届かないんだ、あの塔に。

歯を食いしばり、拳を強く握りしめる。

何かある、何かある、何かある、考える、考える、考える！  
咆哮する黒い魔獣を見上げ、斐文は思考を巡らせる。

………っ！

そうだ！ そうだそうだそうだ！

何故こうなった。なぜ神無は黒い魔獣に変わった。そうだ、

そこだ。なぜ変わった。いや、そう、対峙していた巨大魔人、サウザント、あいつはどこに行つた？

そこだ、直す鍵はそこにある。

私は、神無が魔人を吸収するのを見たことがある。そう、思  
い起せば、クラウンの時も、グロリアの時も、いや、その前  
も。だから、もしかしたら、サウザントも。だとしたら、こう  
なった理由は、サウザント。

………アイだ。

あいつしかいない。あいつに聞けば、何かわかるかもしれない。  
 斐文の眼に光が宿る。

「行くか？」

「ええ」

「そうか、早く戻ってこいよ……、じゃねえと」

銃剣を振りかざし、ヤハヴェが歪んだ顔で笑う。

「神無を、殺し尽くしちまうぜ」

「お好きにどうぞ、出来れば、ね」

余裕の戻った口調で斐文はそう言うと、遠くに見える内区に向かつて走り出した。その後ろ姿を見送り、ヤハヴェは笑う。

「できねえと思ってるからそう言えるんだよな」

そう言って銃剣を軽く振り下ろす。その瞬間、空間に青く煌めく軌跡が描かれ、黒い魔獣の両腕と首を切り落とした。

「ま、半分ぐらいにしとくか」



「つてえ！ くそっ！」

降り注ぐ石の雨に顔を歪め、ガイアは黒い魔獣を睨みつける。  
 蹴り上げてやったがびくともしねえ。くそっ、止めようがねえ。  
 ……！

言い様のない空気から危険を察知し、ガイアは咄嗟に飛び退いた。刹那、空間に青い軌跡が走り、大気と共に黒い魔獣を切り裂いた。

「つつ、なんだ!？」

崩れる瓦礫をよけながら、うまく着地する。

「なんだ、なんだ、なんだ!？ どうなってやがんだ」

混乱するガイアの横にねくらが舞い降りる。

「ビート、見つけたよ」

「ねくらか、でかした。つたく、ビートめ」

教刻前。

ガイア、ねくら、ビートの三人は遠いビルから双眼鏡で黒い魔獣の様子を伺っていた。

動かない黒い魔獣にガイアは欠伸を噛み殺す。

「監視つても退屈だな」

黒い魔獣が動いたのはそんなことを言っていた矢先だった。

そう、そしてその瞬間、ビートも動いた。

「歌姫！ なんてこんなところに!？」

双眼鏡を放り投げて、ビートがビルから飛び降りる。

「ビート！ おい！ くそっ」

「追う?」

「ちっ！ あたりめえだ!？」

そう吐き捨ててガイアはビルから飛び降りる。その姿を見つ



め、ねくらは軽く首をかしげた。

「変なの」

時は戻り、現在。

新しく出来たと思われる瓦礫の前で、ガイアは溜息をつく。

「つたく、心配させやがって」

「わりい……ボス。早まった……わ」

ガイアの見下ろす先、瓦礫に半分埋まったビートが苦笑いを浮かべている。鮮血に染まる瓦礫、潰れて原型を留めていない右腕、皮のジャケットから突き出した白い肋骨。一目見ただけで重傷だとわかる。それでもビートは笑っている。

「流石に……やべえ……わ。頭……ガンガンする」

「無理すんな。ここは俺とねくらでどうにかする。お前は一旦引け」

「だな……流石に……死ぬ……わ。わりい……ボス」

「気にすんな」

軽く飛びながらねくらが瓦礫の上に舞い降りる。

「ビート、ギター」

「お……助かる、ぜ……ねくら……」

左手でギターを受け取り、親指で弦を弾く。その振動が共振して、ビート周りの瓦礫が砂へ変えた。

「痛感切ってる……から……あれだが……ダメージ……が、きつ過ぎる」

ギターを杖がわりにしてよろめきながら立ち上がる。血を何度も吐き出し、顔面蒼白で荒く息をつく。

「ねくら、ビートを連れて外区を出ろ。ここは俺がなんとかしよう」

「えく？ ビート歩いて帰ってよ」

「重傷人に……それは……酷くない？」

苦笑い混じりで話している刹那、混じりつけない純粋な殺気が三人を貫く。三人は瞬時に反応するようにその方向を見た。

「やあ、ギルドのみんな」

歩み出てきたのは、ヤハヴェ。

「お久しぶり」

「……ヤハヴェ」

異様な空気が四人の間に流れる。ヤハヴェは元中央のギルドに所属していた。三人もよく知った人間だ。なのになんだ、三人が感じるこの違和感はその異質さを感じてか、ヤハヴェは軽く笑い口を開いた。

「ねえ、みんな。悪いけど……退場してくれないかな？」

刹那、凄まじい殺気が大気を震わせる。咄嗟に身構える三人、それを見て、ヤハヴェは笑った。

「なんてね、嘘。実はもつと、良いニュースがあつてきたんだ」  
そう言うとヤハヴェはポケットから電子地図を取り出し、手早く操作する。操作が終わると拡大されたホログラムが宙に浮かび出された。

「この外区に居る緑の三つが君たち。黄色が俺。じゃあ、反対側の外区で増殖しているこの赤いマークは何かな？」

ガイアはポケットから電子地図を取り出し、急いで操作し、言葉失う。

「こ……てめえ」

「早く行かないと、まずいんじゃないかな？ イカロスに雪崩込んでくるよ。無差別な殺意がさ」

歯を噛み締め、怒りに震えながら、ガイアはヤハヴェエを睨みつける。

「人が、死ぬぞ」

ガイアは怒りを吐き捨てると踵を返し、声を張り上げる。

「ねくら！ お前はすぐに反対側の外区に向かえ！ ビートを置いたら俺もすぐに合流する。敵はリスカ六脚、数は二千だ！」

「りよ〜かい」

ねくらはそう言うと、すぐさま駆け出した。

ビートに肩を貸し、ガイアはヤハヴェエに対して吐き捨てる。

「ヤハヴェエ……殴られる痛みを忘れちゃったんだな。すぐに、思い出させてやる」

それだけ言うと、ガイアはビートを連れてその場を後にした。

その姿を見送り、ヤハヴェエは軽く笑う。

「殴られる痛みか……ふふ。忘れたんじゃない……もともと、知らないんだよ」

同時刻——騎士団本部

ホログラフイの上で殖え続ける赤い点を見つめ、女性は小さく舌打ちをした。

「さあ、どうする？」

薄く微笑みを浮かべ、ヤハヴェエは女性に問いかけた。女性は眼鏡を中指で上げると、携帯を取り出し、ワンアクションで電話をかける。一回、二回、三回目の呼び出し音が鳴る前に、相手につながる。

「指示通りだ、動け」

女性はつながった瞬間それだけ言うと、すぐに通話を終わらせた。

「これで満足か？」

女性はヤハヴェエに向かってそういうと、不機嫌そうに、椅子に座った。

「そう、その動きだ。それでこそ人間。必死に同種を守ろうとするその姿。滑稽で、昔の英雄を彷彿とさせるよ」

「そうか、光栄だな」

ヤハヴェエの気取った言い回しに、女性は皮肉を吐き捨てる。

同時刻——内区『騎士団本部地下通路前』

騎士団の男は、通話を切り、すぐさま別の場所にコールする。

一回、二回、三回前でつながる。

「準備はいいか？」

その声かけに、携帯の向こうから小さな笑いが聞こえる。  
『今更それを聞きますか？ 準備なんて、ブレックファースト前からできてますわよ』

「そうか、じゃあ、マスターからのオーダーだ。『殲滅せよ』」

『了解ですわ。貴方は、きまさんの？』

「俺は……先約が来た」

そう言つて携帯を切る。

目の前で荒い息をつく一人の少女、そう、見覚えのある顔だ。魔人を回収したときそばにいた……、そう、斐文とか言ったな。

「アイを、何処に連れていった……」

「……お前も魔人だったな」

「答えろ！」

身体を振り回すような捻りから繰り出す打ち下ろしの蹴り、男はその蹴りを左腕で受け止め、小さく呟く。  
「ついでにお前も連れていくか」

震脚。

アスファルトが砕け散る程の踏み込み。男はその力を右拳にのせ、突き出す。

が、その拳は斐文の身体を貫かなかつた。

「此奴は、渡せないんでな」

斐文と男の間に割つて入つたもの。そいつは漆黒の眼をした包帯男、そう、×一。×一は男の突きを片手で受け止め、涼やかに笑っている。

「斐文……アイはこの奥にいる。行け」

「あ……」

一瞬口を開いたが、すぐに閉じ、斐文は二人の横をすり抜け、奥へと走つた。

睨み合う騎士団の男と×一。動かない二人。それは力が均衡しているからではない。ただ、一方的に×一が止めているのだ。

「遊んでやるよ、人間」

そう言つて、×一は男を突き放す。男は体勢を立て直しながら距離を取り、重心を低く構える。

「今日は、こつちだ」

×一は懐から一枚のカードを取り出し、不敵に笑う。

「魔人、相手にとって不足なし、騎士団第一隊長『ゼクス』、参る」

「ああ、いくぞ、天使のように」

#### 同時刻——外区

外壁の亀裂から湧き出すように這い出でる六脚リスカを廃高層ビルから見下ろしながら、少女は小さくため息をつく。

「虫は苦手ですのに……ま、しょうがねえですわね、行きますわよ『エクスマ』！」

少女の声に呼応して巨大な機体がビルの上に跳ね上がると、着地の衝撃で床を突き破りビルの中に落ちていった。機体の開けた大きな穴に向かって飛び降りる少女はスカートを押さえない

から機体の真上へ着地する。

少女の立つ運転席の下で鈍く光る二対の黄眼、その横に生えた巨大な右腕と対照的に小さな左腕、大地を踏みしめる四つ分つは機動有人兵器『エクスマ』。

少女は座席に腰を下ろし、両手で左右の操縦桿を握る。

「行きますわよ。エレガントにね」

『ゴ、オオオオオオオオオ！』

唸るようなエンジン音を上げてエクスマが大きく仰け反り咆哮する。そして、壁を突き破って外に飛び出した。足元に群がるリスカの群れ、その真ん中にエクスマは落下する。

落下の衝撃で揺れる廃墟の街と突然の出来事に一瞬止まるリスカの動き。その真ん中で一匹のリスカを踏みしめ不気味に唸るエクスマ。

「オオオオオオオオオ」

巨大な右腕を振り上げ、虫を潰すような六脚リスカを叩き伏せる。そのまま、腕を払い横のビル壁を破壊しながら、振り回す尻尾で群がるリスカをなぎ払った。その遠心力で跳ね回り、無数のリスカを破壊しながらエクスマは細い瓦礫の間を移動し続ける。

「あはっ、なかなかイカしますわね、シオマネキハンド。じゃあ、これも、試してみようかしら？」

巨大な腕で地面を叩き、その衝撃で躰を跳ね上げる。そして、

崩れかけたビルの窓枠に巨大な腕を引っ掛けてその躰を固定した。

「カレトヴルッフ」

小さな左腕が展開し、中から小さな刃の付いた柄が滑り出す。瞬時に左腕を閉じ、掌でそれを握った。その瞬間、小さな刃が開き、吹き出した赤い粒子が巨大な刃を形成する。

「さあ、ダンスを、踊りましょ」



「……侵入者がいるね。この感じは……なるほど、面白い」

暗室の中でヤハヴェエは呟き笑う。そして、手にした電子地図を操作し、何かを送信した。

「ここは私の城だ。好き勝手されては困るな」

ヤハヴェエの行動を見て、女性は不機嫌そうに口を開く。その言葉に反応し、ヤハヴェエは皮肉たつぷりに言った。

「貴様の身勝手を帳消しにするチャンスが来たんだ。干渉するな。それが、神の、御意思だ。わかるか？ 人間」

「生憎、神は信じてないんでな」

同刻。

不意の着信に斐文の緊張の糸が切れる。走りっぱなしで酷使し続けた身体が足を止める口実を欲しがったのだろうか？ 斐

文は無意識に足を止めていた。荒い息をつきながら、斐文は電子地図を取り出す。鳴動する電子地図を操作すると、発送者非通知の新着メールが一件。開封するとデータのダウンロードが始まり、自動でホログラフィックを空中に浮かび上がらせる。

「……これは……」

浮かび上がったのは建物の見取り図だった。青いマーキングは自分。その後ろにつながる青い線は通ってきた道？ と、いうことは、このマップは、この建物？ 誰が、何の為に？ 立体的な見取り図を見ながら差出人の真意に考えを巡らせる。

まあ、いい。どんな真意があるろうと、今の私はそれに乗るしかない。進むしか、ない。

建物頂上付近で光る緑のマーキングと黄色のマーキング、地下で輝く青いマーキング。

緑は人間、赤はリスカ、青は、魔人。正体不明の黄色が気になるところだが、今はアイにすることが優先だ。そう頭を切り替え、斐文は再び走り出す。

#### 同時刻——外区

舞い踊る瓦礫と鉄屑をかき分け、エクスマが踊る。巨大な右腕はリスカを叩き伏せ、左手にもったカレットヴルツフは廃ビルの壁やリスカをバターののように切り刻む。

「あはははははは、最っ高ですわ！」

廃ビルの上、狂乱するように踊り狂うエクスマを冷めた眼で

見下ろし、不敵に笑うねくらは大きな声でエクスマに呼びかけた。

「アーあーシャちゃん！ あーそーぼっ！」

大きな声でそう叫ぶと、ねくらは笑いながらビルからエクスマに向かって飛び降りた。

「っ！ ねくら！」

エクスマを回転させ、振り下ろされるねくらの大鎌をカレットヴルツフで受け止める。

「アーシャ、ボクと遊ばない？ どっちが多くリスカをばらせるか、さ」

「残念ですわね、ねくら。わたくし今、ビジネス中ですの。一昨日きやがれですわ」

カレットヴルツフを振り抜き、大鎌を弾く。ねくらは宙を舞うとスカートをためかせながらゆつくりと着地する。

「じゃ、ボクはボクで、勝手に殺らせてもらおうかな。無差別にね」

「範囲内に入ったら容赦なく切り刻みますから、端っこの方にもいたほうがいいんじゃないやありませんの？」

「それは、お互い様だよ。アーシャ」

「さ」

『パーティータイムだ』



電子地図に届いた発送者不明のマップを頼りに、斐文は走る。建物の奥へ、そのまた奥へ。不意に過ぎる疑問、何故誰もいない？ 何故ロックが掛かっていない？ 何故、こんなにもすんなり事が進む？ まるで答えを知っている誰かに操られているような、そんな錯覚に陥る。そんな疑問も、不安も飲み下し、斐文はただひたすらに走る。そう、終わりが道を遮る、その時まで。

「……………」

電子地図に浮かぶ、青い二つのマーキングが、わずかに重なる。道を遮る重厚な扉。その向こうに、アイが、いる。歩み寄ると、重厚な扉は重低音を響かせ自動的に開いていく。扉の向こうから溢れ出す白い霧をかき分け、斐文は部屋の中へと進む。

ほの暗い部屋……いや、空洞といったほうがしっくりくる領域。天井は高く、地面は荒れてゴツゴツしている。周りを囲む金属の壁には、無数のコードが走り、気味の悪い雰囲気を醸し出す。冷却するためか冷たい霧が膝の辺りまで充滿している。部屋の奥で赤い光が仄かに輝いている。斐文はそれに導かれるように部屋の奥へと進んだ。

「……アイ」

視線を上げ、斐文は小さく呟いた。

欠けた十字架のオブジェに絡まる無数の鋼鉄ワイヤーと鎖の真ん中にアイはいた。ワイヤーに囚われ、身動きできぬ幼い身

体に舌を噛みきらぬように噛ませた鋼鉄の開口具。十字架に張り付けられぐったりと項垂れるその姿はどこか背徳感を感じさせた。

斐文の声を聞き、アイはうつすらと眼を開いた。涎を垂しながら顔を上げ、斐文を見るとアイは小さく唸った。その瞬間、鋼鉄のひしゃげる嫌な音がアイの口から響いてきた。

「べっ」

噛み潰された鋼鉄の開口具を吐き出し、アイは笑った。

「こんなもので魔人を制した気であるなんて、可愛いわね、人間って」

「貴方に、聞きたいことがある」

薄く笑うアイの言葉が無視し、斐文は真顔でアイに問い掛けた。

「知ってるよ、神無の事でしょ？」

見透かしたアイの言葉に、斐文は口を閉じる。

「神無が魔獣化して制御できない。制御する方法はないか？ そんなとこ？」

「……色々、知ってるみたいね」

「知ってるわ。だって私とサウザントは、つながっているもの。

今も、そしてこれからもね」

「なら、教えなさい。貴方がサウザントを制御していたように、魔獣化した神無を制御する方法を！」

必死さの滲み出る斐文の言葉にアイは小さく笑う。

「いいよ。教えてあげる。命を賭ける気が、あるならね」

「そんなもの、いくらでも賭けてやる」

強く言い切る斐文にアイはまた笑った。

「いいわ、その眼。本当に、私も……」

そこまで言っただけでアイは押し黙る。

「……んべ」

濁った言葉を吐き出し、顔を上げたアイの舌の上には逆十字を型どったネックレスが鈍く輝いていた。アイが少し頭を下げると、ネックレスは重力に引かれ舌の上から滑り落ちた。

「それ、共振機『グレイプニール』。貴方の持つてる改竄の弾丸、その強化版みたいなものよ。それを持って強く念じれば、思いは届くわ」

グレイプニールを拾い上げる斐文にアイは付け加える。

「ただし、魔人状態じゃないと効果はないわ」

「……そう」

「それを使えば、命と引換えに願いを叶えられるかもよ？」

薄く笑い、アイはそう言う。その言葉に、斐文はこう答えた。

「私の願いは、もう、違うの」

それだけ言っただけで斐文は駆け出した。その後ろ姿を見送りながらアイは小さく呟いた。

「貴方は向き合っているのね。私も、向き合うわ。……サウザント」

向かう先に望んだ未来がなくても。

途中、辛い現実しなくても。

私は歩むこと、進むことをやめない。

立ち止まった辛い現実にはいたくないから。

望む未来は、今や過去にはないから。

私は、未来に向かつて歩むことを選択し続ける。

それが、押し付けられた運命に対する、唯一の抵抗。

私が私たる、証明。

#### 同時刻——外区

巨大な鎌がリスカを薙ぎ払う。別の場所で煌めく赤い軌跡が廃ビル諸共リスカを刻む。ねくらの操る巨大鎌の白い軌跡とアーシャの駆るエクスマが振りかざすカレットヴルツの赤い煌き。それが交わったとき、リスカの掃討は完了していた。

ぶつかり合う巨大鎌とカレットヴルツ、火花を散らしせめぎ合いながら二人は言葉を交わす。

「今、わたくしを狙いましたわね！」

「は？ 何いってんの？ アーシャがボクを狙ったんだろ？」

言い掛かりはやめてくれないかな？」

「すぐ人のせいにする、これだから最下層民は嫌ですわ」

「成金に言われたくないね。前線に出てなった成金だから、歩、

金成りか？ 雑魚1」

「くっ、言ってくれますわね」





私は、人を殺す、機械だった。

意味もなく、理由もなく、ただ、人を殺していた。

それから何があったかは記憶にない。

次に気づいたとき、私は人間だった。

殺意に恐れを抱く、弱い人間だった。

無機質に映してきた死のビジョンに気が狂いそうだった。その感触をリフレインするたびに吐き気が止まらなかった。

私は呪った、この身体を与えたものを、心というものを。

苦しくて、苦しくて、何度も死を願った。

だが、それが叶うことはなかった。

死のうとしても、私の身体がそれを許さなかった。

ストッパーがかかったように動かなくなり、そのたびに私は絶望する。

私は罰を受けている。

過去の罪に対する罰を。

死という逃げすら許されず、私は罰を受け続けている。

人間として、私は。

その感情を受け入れ、それでも私は呪った。

私を人間にしたものを。

私はそれに対する復讐を願った。

神に対する復讐を。

その復讐の為なら何でもするつもりだった。

その復讐に逃避し、何もかも忘れられるのなら。

でも、私は。

「ぐっ！」

目眩に襲われ、壁に寄りかかる。

引つ張られる感覚、何か、懐かしいような、それでいて怖い

感覚。

何か、来ている。

急がないと。

「神無」

力を振り絞り、斐文は再び走り出した。

同時刻——内区『騎士団本部地下通路前』

「ふん、まあ、こんなもんか」

かざしたカードが粉になり、宙に溶けていく。

向かい合う×一と満身創痍のゼクス。

道路は穴と鮮血でぐちゃぐちゃになり、壁にもベッタリと鮮

血が染み付いている。片膝を付き、鮮血を流しながらゼクスが

荒い息をつく。

「なっ、ぐっ、がはっ……」

「なかなか面白かったが、所詮は人間」

「ぐっ……トドメを……」

睨みつけながらそう絞り出すゼクスに×一は笑いながら答える。

「嫌だね。無様に生きながらえる。弱い奴は生き死にすら選べ

ねえ。不自由に、生き恥を晒せ」

そう言つて笑うと、×一は宙を仰ぐ。

「……来たか、そろそろ終わりがちかそうだ。さあ、どう転ぶ?」

### 同時刻——『騎士団本部地下道』

「会いに、いく……サウザント……」

壁に寄りかかり、身体を引き摺りながら、アイは地下道を進む。拘束を無理やりちぎったせいか身体には痛々しい擦り傷と痣が刻まれていた。引きずる足、滴る鮮血、力なく折れ曲がつた腕。それでもアイは先に進む。

望んでいたもの、前を見る目、未来に向かうこと。

アイはそれを嘔み締め、一步一步進んでいた。

「辛そうだな、魔人」

声をかけられ、アイは歩みを止め、顔を上げる。

そこに居たのは眼鏡をかけた女性。

漆黒のロングヘアに射抜くような黒い眼。小さな眼鏡を鼻にかけ、不敵な微笑みを浮かべるスーツをまとったスレンダーな女性。腕を組み、大きな胸を押しつぶしながら女性は笑う。

「楽にしてやろう」

「人間風情が……私を、止められると、思うな!」

勢いよく舌を噛み切ると、青い炎がアイを包み込み、紫の装甲を纏った魔人へと姿を変えた。

「私は、私は」

青い炎を吐き出し、猛る紫の魔人を前に女性はゆっくりと腰を落として構えた。

「来い、魔人」

紫の腕を振りかぶり、一撃を振りおろそうとしたその時、建物全体を揺るがすような振動が女性の足元から発生した。

踏み出した右足はコンクリートをベニア板のように踏み抜き、亀裂は広がりながらクレーターを形成していく。舞い上がる石礫と砂粉塵の向こうで女性が小さく息を吐く。

一撃。

振り下ろすより早く、女性の拳が紫の魔人に突き刺さった。

卵の殻のように脆く陥没していく紫の装甲、一撃の衝撃で波紋が広がるように紫の魔人の全身に亀裂が走る。

装甲は粉となつて碎け散り、中から青い炎をまとったアイが力なく床に倒れこんだ。

打った右手を閉じたり開いたりしながら女性はこんなものかと吐き捨てた。

「まあ、いい。黒い奴さえ押さえれば、目的は達せられる。その前に、下準備をしなくちゃな」

軽く埃を払うと、女性はアイに背中を向け、来た道に戻つていった。



外区——ガイア、ねくら、アーシャ

「ぐっ、でええ」

降り下ろされる鋼鉄の一撃を躲し、逃げるように距離をとる。

「なんだこいつ、滅茶苦茶じゃねえか！」

巨軀のドラゴンを前に三人は防戦一方だった。

無造作に振りかざす鋼鉄の一撃はまさに一撃必殺の破壊力で隙を見て反撃するも、ダメージが通らない。おまけにリスカの残骸を貪り増長し続けている。

「こんなん、どうやって止めろってんだ」

ビルの陰に隠れながらガイアは荒い息をつき、吐き捨てる。

攻撃をよけながらカレットヴルツフで戦うエクスマ、死角から何度も鎌を突き立てるねくら。

「まるで熊対蟻だな」

静かに息を吐き、深呼吸するとガイアはビルの影から飛び出し、ドラゴンに向かって走った。

降り下ろされる一撃がコンクリートを破砕し、飛び散る破片が皮膚を裂く。それでも怯まずガイアは走る。

「いっくぞ！」

懐に入り、ガイアは渾身の力を込めて頭上に浮かぶドラゴンの顎を蹴り上げた。

手応えはある、だが……。

「ゴオオオオオオオオオオ！」

ドラゴンは怯むことなく天を仰ぎ、衝撃波を伴うほどの叫び

声を上げた。

その叫び声で廃墟のビルというビルのガラスは砕け散り、建物には亀裂が入り、攻撃していた三人も押し戻されるように吹き飛ばされた。

「でっ！ くろう」

上からの衝撃波で体を地面に叩きつけられたガイアは反射的にドラゴンを仰いだ。

天に向かって吠え続けるドラゴン。その背中から六枚、光の翼が広がり、風を纏っている。

「まさか……そんな！」

「オオオオオオオオオオオオオオ！」

同時刻——騎士団本部

地下を出た空我は、その足で砕かれたハイウェイまで上がった。壁に寄りかかり満身創痍なゼクスを一瞥すると小さく息を吐く。

「こっちはアタリか」

「申し訳ありません」

「いや、いい。アタリならお前に止められては困る」

遠くを見詰め、空我は目を細める。

「使徒を減らされては困るんだがね」

背後から声をかけられ、空我はゆっくりと後ろを向く。

「ヤハヴェ」

「その名は朽ちた名だ。この身体の、いや、顔といったほうがいいか」

顎をさすり、ヤハヴェは薄く微笑んだ。

「！ お前は！」

ヤハヴェの異質さに気付き、空我は咄嗟に構える。今にも殴りかかりそうな空我にヤハヴェはゆつくりと掌をかざし、沈黙の圧力で静止した。

「驚いたよ。人間に使徒が倒せるとはね。いや、君は正確な意味で人間ではないか？ まあ、ひとくりに人間だろう。少し興味がわいたよ」

そう言つてゆつくりとかざした掌を下ろす。掌の向こうで微笑むヤハヴェのその顔は人間のように人間ではなく、感情のないような、作り物の微笑み。それでいて、戦慄を感じさせた。

「殺すのが惜しいほどにね」

ヤハヴェの言葉より早いか、空我は踏み込み、渾身の一撃をヤハヴェに叩き込んだ。

「失せろ、ここは私達の世界だ」

「ふふふ、なら、作り替えるよ。神の國に」

薄笑いを浮かべるヤハヴェの顔がみるみる青白くなっていく。拳を引くとヤハヴェは前屈みになり、大量の血を吐いた。

「ぐっ、がはははは……くっ、くっ、11<sup>イレブン</sup>、めえ、やつてくれたなあ」

顔を上げ、苦痛で引きつった表情のヤハヴェは唸るように叫ぶ。

「殺してやる、神も、人間も、何もかも！」

そう言つた瞬間、一本の槍がヤハヴェの身体を後ろから貫いた。

「がっ！ くっ、ぐうう」

矢継ぎ早に後方から飛び来る槍がヤハヴェの身体を貫いていく。

「がっ……俺は……神だぞ……」

何本目の槍を身体に受け、ヤハヴェは前のめりに倒れた。赤い鮮血がゆつくりとひび割れたアスファルトを染めていく。

「神が、死ぬか」

言葉を吐き捨て、空我はヤハヴェを見下ろす。

「なんか、敵っぽかったから撃ちまわったっすけど、大丈夫っすか？」

笑い混じりの軽い口調でヤハヴェ側から女性が現れる。真っ白い髪に、開いてるかわからないほどの細い目。前を開けたジージャンとタイトなジーンズに黒いシャツ。大きなトランクを手を持った若い女性が、人懐っこい笑顔を浮かべながら空我に歩み寄ってくる。

「ああ、問題ない」

「じゃあ、行きましょう。パーティー会場まで。足は用意したっすよ」

指を鳴らすと、砕けた壁の向こうから唸りを上げて巨大なバイクがすっ飛ばしてきた。

「運転はあちしにおまかせっす。すつとばすつすよ！」  
「ゼクス、あとは任せた」

壁によりかかるゼクスにそれだけ言い残すと、空我は巨大なバイクのサイドカーに腰を下ろす。

「さあ、魔獣狩りだ」



「はあはあはあはあ」

意識が引つ張られる感覚にふらつきながらも斐文は外区まで戻ってきた。

懐かしいような感覚、それでいて、苦しい。

胸を押さえながら、ただひたすらに神無を求めて走る。

何故。

何故？

なぜ私は神無に固執する？

殺されたいだけなら神威でも良かったはずなのに、何故？

私は、私は。

地響きを引き連れて、黒い魔獣が暴れる。

唸るその声。

助けを求める声に聞こえる。

私は、神無を。

神無は、私を。

瓦礫を登り、黒い魔獣を見下ろすビルの上で斐文は荒く息をつく。

神無、神無神無神無神無、神無！

「私は何度でも貴方の名を呼ぶ！ だから私を見て！ 神無！」

銀の銃を取り出し、こめかみに当て、引き金をひ……けない。  
ストッパー！？

自殺防止のストッパー、こんな時に。

黒い魔獣は立ち上がり、ゆつくりと斐文を見る。そして、大きく吠え、全身のバネを使って飛びかかった。

神無。

刹那、轟音と共に巨大なドラゴンが光の翼を広げながら迫り来る。無数の機械を寄せ集め形成された歪なドラゴンは異常発達した腕を振り上げると一直線に黒い魔獣に襲いかかった。ぶつかり砕け散る装甲と機械の腕、それは瞬時に再生し、二体は食いつくように火花を散らして掴みあった。

魂を強く引かれる感覚が斐文を襲う。

「オオ、オオオオオオオオオオ！」

「わ……た……し……？」

膝をつき、力無く崩れ落ちる。

魂が引き合う、私がああ機械のドラゴンに帰ろうとしていく？ ああ機械のドラゴンは、私？

跪いたまま、斐文は荒い息をつく。

斐文の手から離れ、床を転がる銀の銃が何者かの足にあたり止まった。

銃を拾い上げ、影は斐文の顔にかかる。

顔を上げると、そこには×一が立っていた。

「こうするのは、何時ぶりかな」

そう言つて×一は銀の銃に弾丸を込める。そして、ゆっくりと斐文のこめかみに押し当てた。

「さあ、行つてこい。今度は、生かすために撃つてやる」

口元を歪ませてそういうと×一は引き金を引いた。

燃え上がる青い炎。

その中で青い魔人が叫ぶ。

装甲の間から鮮血を流しながら。

まるで赤い涙を流すように。

聞。

前後左右も、上も下も。

包み込むような、押しつぶすような。

聞。

わからない。

ここがどこかすら。

わからない。

自分が誰なのかすら。

わからない。

静寂の残響が木霊し、うるさいぐらいに聴覚を支配する。

あの声が。

呼ぶ声が。

聞こえない。

#### 第四節 冒流の魔人

「よお、神無」

くぐもった声に、目を開ける。

「神無？」

「ああ、お前の名前だ。忘れたか？」

「神無、いや、神無だ」

「そう、神無だ」

闇が薄まり、自分の存在を認識する。

「そう、神無だ」

目の前で自分と同じ顔をした男が口角を歪めて笑う。

「久しぶり、いや、はじめましてか？ まあ、どっちでもいいか。神無……ようこそ、世界へ」

「世界？」

「ああ、俺たちの、世界だ。とても深くて暗い。心の世界だ」

「……心」

「そうだ、意識でも視覚でも触覚でも計り知れない。暗く、とてもとても深い、底なし沼のような、闇の世界だ」

「闇」

「まあ、ゆっくりしていけや。つと、言いたいところだが、どうも外が騒がしい。早めに辿ってもらおうか」

そういうと男は神無の首を掴み、片手で軽々と宙に浮かせる。

「さあ、行ってこい。追憶の旅に。先ずは、俺、神威の記憶だ」

神威が手を離すと神無の足は地面に沈んでいった。深い闇に飲み込まれるように。抵抗するように少しもがくが、闇は引き摺り込むように神無の身体に絡みつき、地面の闇に押し込めようとする。

その様子を見つめながら神威は口角を歪ませ笑う。

「さあ、己を知ってこい。全てを知ったら……」

言葉の最後を聞き取れぬまま、神無の身体は闇に沈んでいった。



銃声がけたたましく鳴り響く。

頭の中で何度も反響して、鼓膜を破るように脳を振動させる。

そんな騒音の中で俺は少女の声を聞いた。

『イオ』

「ぐっ！ つっ」

不愉快感に包まれながら気だるく手を上げる。

重い、まるで何かに埋まっているような感覚だ。そう感じながらも、俺は力づくで手を上げた。

光を遮る影と、頬を叩く無数の粒に、俺はゆっくりと眼を開ける。

視界に入ったのはノイズのような砂嵐と顔を覗き込む女の女に、俺は見覚えがあった。そう、そうだ。イオが大切にしていた女。名前は、そう、ブレイン1。

いや、待てよ、おかしいぞ。

ブレイン1は確か……。

……まあ、いい。

それより、今の状態だ。

頭の中にイオの感覚がない。

それでいて、俺がこの身体を支配している。

つまり、俺は、身体を手にしたのだ。

もう、イオの影じゃない。罪のスケープゴートじゃない。

俺は、俺になったんだ。

そう思った途端、心の底から笑いがこみ上げてきた。

イオは死んだんだ。

罪のはけ口として俺を作り出したイオは、死んだ。

「く、くくくく」

あの女をかばって。

「くたばりやがった!」

笑い混じりに大きく叫び、俺は身体を起こした。

この感覚、この昂り、全部俺のだ!

「ふふふふふ、ははははははははははっ!」

周りは全部砂。と、言うことは下界か。空中庭園から落ちたつてとこだな。

砂を払い除けず、力任せに立ち上がる。強く吹く砂嵐がまとわりついた砂を吹き飛ばす。

痛みはない。だが、何だこの身体は?

鉤物のように硬い装甲で包まれた両腕と両足。それは外骨格のように刺々しく、黒く光るそれは狩りのために獣が持つ、爪と牙のようだ。

「悪くは、ないな」

もともと、俺はそういう役目だ。

「目覚めはどうかしら?」

俺の動きを見ていた女が口を開く。

見れば見るほどブレイン1の面影がある。が、俺の記憶の中のブレイン1はもつと幼かった……、いや、待てよ、俺のこの身体、あの時よりでかいな。ということは、随分時間が経っているということか?

「貴方? イオ?」

押し黙っている俺に、ブレイン1は恐る恐る尋ねる。違う。

俺はイオの影、イオの殺意を引き受ける者。そう、それが俺。

人殺しを嫌うブレイン1に嫌われないようにイオが作った架空の人格。

俺は。

「神威だ」

暗転

足りねえ。

すぐにでもこんなところ出て行きてえのによお。

神威は苛立っていた。

頭の中で響くブレイン1の残響。

大気のように纏わりつく喪失感。

監視するように付き纏うブレイン1の面影。



何もかも気に入らねえ。

「俺の中にある命が足りねえって言ってるやがる」

くそつ、穴だらけのパズルだ。

埋めなきゃ、俺になれねえ。

折角、命も身体も手に入れたつてのによお。

「なんでこんなにイラつくんだ！」

黒い装甲をまとった腕で強化ガラス張りのビルを殴りつける。

ガラスは一斉に砕け、神威の上に降り注いだ。

「神威！」

降り注ぐガラスを受け、血塗れになった神威にブレイン1が駆け寄ろうとする。

「来るな！」

力強い拒絶の言葉を吐き捨て、ブレイン1を睨みつける。

「てめえが近くにいたるところせえんだよ。死にたくなきゃ、俺

の視界に入るんじゃないやねえ！」

ああ、うるせえうるせえ。

頭の中で木霊するブレイン1の声。

イオを呼ぶ声。

俺は神威だ。

神威なんだよ！

暗転

何回目の廃墟だ。

(スネイルに入ってから人のいる街に出会わねえ。端っことはいえ、ここまで出会わねえと妙だ)

そう考えながら、街を見渡す。

天蓋の上に積もった砂の隙間から差し込む僅かな光が、街をほの暗く浮かび上がらせる。

「くっ！」

一瞬、動悸が激しくなり、神威は胸を掻きむしった。

疼く、胸の傷が、疼く。

感覚的に何かを察知し、俺は目の前に並ぶ建物を見上げた。

手前から三つ目、五階建てのビルの上に、奴はいた。

白いショートヘアに虚ろな目、屋上の縁に佇む、白い姿をし

た少女。少女は目だけで俺を見ると虚ろなまま、宙に身を投げ

た。

重力に引かれ、落下速度は上がり、手を滑らせ落とした生卵のように、無残に飛び散り地面にへばりつく。

その肉塊、鮮血が、青い炎で燃え上がり、蠢き、立ち上がった。

ああ、そうか、こいつが。

魔人。

(俺と同じ、命を複数保有するもの)

途中の廃墟にあった走り書きを思い出す。

『青い炎の化け物が街を食った。人じゃない、獣じゃない、悪

「魔だ、魔人だ」

「魔人……か」

黒い装甲の拳を握り締め、目の前の燃え立つ魔人を睨みつける。

「街を食ったためえを食べば、腹は満ちるか？」

蠢き燃え立つ魔人はゆっくりと右手をかざし、静かに呻く。

「命、私の、命」

散らばった鮮血が燃え上がり、無数の腕を形成する。

その腕達が一斉に神威に襲いかかった。

「はっ、遅いな！」

襲い来る無数の腕をかいくぐり、神威は一瞬で燃え立つ魔人の懐に入り込む。

「命、いや。死ぬのは、いや。殺すのは、いや」

静かな呻き声が聞こえる。

「その生を悔いろ。DEAD END」

右手の装甲が展開し、黒い炎が逆る。

一閃。

打ち上げる一撃が、燃え立つ魔人を貫いた。

「いや、いや、いや、いや」

「何も考えるな。孤独に耐えられるほど、人は強くない。拒絶だけじゃ、生きられない」

黒い炎が燃え上がり、青い炎を侵食していく。青い炎は黒い炎に食われ、黒い装甲の中に消えていった。

崩れ落ちる灰の塊から手を抜き、神威は胸に手を当てた。欠けたピースがはまる感覚。

狂気が収まった一瞬。

胸糞悪く、吐き気がする安らぎという感情。

胸の傷をかきむしり、神威は苛立ちを露わにする。

「まだだ、足りねえ、急がねえとな」

ここにいと、俺が消えちまう。

イオの野郎、まだ消えちやいねえ！

消されてたまるか！

暗転

胸の傷が疼く。

相変わらず一定距離を保ちながら付いてくるブレイン1。それを鬱陶しく感じながらも神威は無視を続ける。そう、今、神威は目の前の男に集中していた。

神威の眼前にしゃがみこむ男、真っ白い髪をかきむしりうずくまるその男の周りには無数の白骨が転がっている。

男を照らす街灯、その光が映すところだけが、まるで切り取られた世界のように現実味を持って浮かび上がる。

「……らい……まい」

「あ？」

「暗い、狭い、誰か……」

眩きながら白髪の男が立ち上がる。蒼白な顔に充血した焦点の定まらない目、濃い隈。

「誰かここから出してくれー!」

男が叫んだ瞬間、明かりをともしていたすべての街灯が砕け散った。それが最後のリミッターだった。男の首に黒い痣が浮かび上がり、男が苦しみ出す。そして、青い炎が男を包んだ。

「死を……受け入れよ……」

青い炎を切り裂いて、透明な腕が姿を現す。紫色の息を吐き出し、炎から這い出す透明の魔人。燻る炎のように透明魔人の中で紫のガスが渦巻いている。

「死は……平等だ……」

両腕を広げて透明の魔人が言葉と共に紫のガスを吐き出す。

「はあ? 怯えていたやつがよく言うぜ」

青い炎を迸らせ、神威が猛る。

「死を……」

クリスタル状の身体から紫のガスを絞り出す。ガスは意志を持っていくかのようにうねり、巨大な大蛇を型どり、宙を舞う。

「受け入れよ……」

透明な腕を神威へ振るうと大蛇は透明魔人の上を一回廻り、狙いを神威に定めると大きく口を開き、襲いかかる。

「つ!」

神威はその攻撃を紙一重で躲し、距離を詰めようと前が出る。

「!」

後ろから襲い来る大蛇の顎、神威はそれを察知し、咄嗟に横に飛ぶ。それは悪手。横に待ち構えていた大蛇の尾に突っ込む形で回避することになってしまった。

「くっ、つっ!」

紫のガスを払いのけ、止めていた息を吐く。

(こいつは、毒ガスか。しかも結構タチの悪いやつだな)

紫のガスを受けた右腕は腐食するようにボロボロと崩れ落ち、半分近く欠けている。神威は腐食した右腕を軽くもぎ取り、無造作に投げ捨てる。もがれた右腕は青い炎に包まれ、一瞬で消えてなくなると、舞い上がった青い炎は右腕のあった場所に戻り、新たな右腕を形成した。

「くっだらねえ。とつとと食い殺してやるぜ」

新たに形成された右腕を展開させ、黒い炎を纏わせる。

「死を受け入れるとは言わねえ。ただ、生まれたことを悔いる」  
宙を舞う大蛇と、その下で無防備に両手を広げる透明の魔人。

それと向き合う神威。勝負は一瞬で付ける、はずだった。

襲い来る毒の大蛇を躲し、無防備な透明魔人に向かって拳をかざす。

「DEAD END!」

黒い炎を纏った拳が透明魔人を貫く。

その瞬間、身体が強制的に振り向かされる。その視界に入ったのは、ブレイン1。

コントロールを失った毒の大蛇がブレイン1に向かって一直

線で突撃している。

それを確認するやいなや、身体が意思に反して強制的に動く。大蛇を追い抜き、庇うようにブレイン1の前に立ち塞がった。

（何をやってるんだ、俺は！）

そう思うが早いか、大蛇の牙が深々と生身に突き刺さった。

「ぐつがああ！」

そのまま勢いを殺さず、大蛇が神威の身体に浸透していく。

「がああああああああ！」

絶叫と共に神威は両膝を付いた。

「神威！」

「来んじやねえ！」

駆け寄ろうとするブレイン1を神威は威圧するように制止する。

「てめえは、てめえは！」

胸の傷を押さえ、神威はその場にうずくまった。

傷が疼く、声が響く、ノイズが、ノイズが！

「がああああああああああ！」

両腕を振り上げ、勢いよく振り下ろし地面を叩く。アスファ

ルトは砕け、無数の亀裂が地面を分断した。

「……なんだよ。簡単なことじゃねえか」

小さく呟くと、神威はよろめきながら立ち上がり、ブレイン

1のもとに向かった。

対峙するブレイン1と神威。

一歩引こうとしたブレイン1の肩を掴み、無言で神威はブレイン1の胸に爪を突き刺した。

「かつ！」

驚いた表情を浮かべるブレイン1に神威は吐き捨てる。

「ノイズだ……お前は、消えてしまえ」

ゆっくりと爪を押し込む。骨、肉、内臓にゆっくりと突き刺さる音が静寂の中でやけにうるさく響く。

「かつ、はかつ、はつ！」

肺を貫かれ、口から血の泡を吐き出しながら、苦痛の表情を

浮かべるブレイン1。逃がさぬよう掴む神威の左手にも力が入

り、もぎ取るような勢いでブレイン1の右肩を貫いていく。

指が完全に突き刺さると神威は力を込め、一気に腹まで引き

裂いた。吹き出す鮮血が神威の顔を染め、左手を離すとブレ

イン1は力無く膝から落ちる。その衝撃で腹の傷から臓物が溢れ、

地面に血肉の水溜まりを作った。

ノイズ、ノイズ、ノイズ、ノイズだ。

震える手で銃を構え、ブレイン1は神威を睨みつける。

「そんなもので俺を殺すのか？」

無感情に尋ねるとブレイン1は息も絶え絶えに言葉を絞り出

した。

「私は……死にたかったけど……貴方に殺されるのは……死ん

でも……いやっ！」

引き金が引かれ、撃鉄から火花が散る。

一撃。そう、小さな一発の弾丸が胸の傷跡を正確に射抜いた。ダメージはない。

そう、ダメージは……。

「ぐっ、うぐっ！」

(なんだ、これは)

声が、声の中で共振する！

声が、あの声が、俺を消そうとするあの声が！

「あああ、があ、あああああああ！」

ノイズ、ノイズ、ノイズノイズノイズノイズノイズ、ノイズ！

「があ！」

神威は半狂乱の状態で腕を薙ぎ、ブレイン1の首をはねた。

(俺は、俺は、俺は、俺は)

「違う、俺は神威だ。イオじゃない。神威だ！」

血涙を流しながら神威はよろめき、その場を立ち去る。

自己暗示のように自分の名を呟き続けて。

その後ろ姿を見送り、一人の男がピルの影から現れる。男は、転がるブレイン1の首を拾い上げると、力無く座り込んだブレイン1の身体に向かって放り投げた。

座り込んだ身体は落ちてくる頭に手を伸ばし、うまくキャッチすると帽子をかぶるように頭を傷口に合わせた。

「どうですか？ 彼は」

男が口を開くとブレイン1は薄く笑い答える。

『ダメだね。彼はつまらんよ』

溢れ出した内臓と鮮血が逆再生をかけたように腹の傷口に収まっていく。完全に収まり、傷口が塞がるのを確認してブレイン1は立ち上がった。

『僕が求めるのは、あくまで命の器『イオ』だけだ。神威は、知らない』

「了解しました」

それだけ言うと、男は影に溶けていった。

ブレイン1は薄く笑う。

『でも、驚いたよ。神威がイオの静止を振り切り切れるなんてね。イオの想いが弱いのか、神威の怒りが強いのか。

どちらにせよ。

まだ楽しめそうだ』

まだ楽しめそうだ』

暗転

暗転

ノイズ。

ノイズノイズノイズノイズノイズノイズ。

砂嵐の中を歩いているようだ。

何処に向かっていているのか、何故歩いているのか、何もかも定かじらない。

俺はどこにいる？

俺は、何処だ？

「楽しんでるか、神威」

声をかけられ、足を止める。

ノイズの中に佇む人影。顔を包帯で覆い、心のない微笑を浮かべる男。

「ああ、そういうえば殺し損なっていたな」

不機嫌に吐き捨てる、見下すように顔を上げる。

「君を見ると傷が疼くよ。今すぐにも同じ目に合わせてやりたいくらいにね。でも、君じゃないんだ」

「イオ……イオイオイオイオ、てめえもイオか。うんざりだ。」

俺は……神威だ！」

一気に距離を詰め、拳を振り上げる。装甲に覆われた黒い拳は、空を切り、男を捉える。

「神威……そう、君は、不要だ」

黒い拳を片手で受け止め、男は呟く。

「壊れて、消えろ」

額に当てられる銀の銃口。振り払う間もなく引き金が引かれた。

一瞬の衝撃と攪拌される頭蓋の内側でたたましく木霊する残響達……全てが、スベテガ。

「が、あああああああああああああああああああ！」

「さあ、壊れる。イオとなるために、いや、イオであるために」

「がっ……つつ、はあああああああああ」

真っ白い息を吐き出し、神威が覚醒する。

「死ぬかよ……消えるかよ！ 俺は神威！ 純然たる殺意、神

威だ！」

青い炎が燃え上がり、神威を包み込む。展開する両手足の装甲から吹き出す青い炎は黒く染まり、漆黒の装甲をより深くする。

黒い炎を裂いて現れたるは漆黒の魔人。

魔人は黒い炎を纏い、憤怒を吐き出す。

「皆殺しだ、何もかも、破壊してやる。全部、全部！」

その姿を見て、男は薄く笑った。

「素晴らしい。本当に君は……つつ？ これはこれは」

男が気付き、向けた視線の先には一人の白い男が歩いてきていた。

真っ白い髪に白いブーツ、真っ白いロングコートと異常なほどの殺意を身にまとった男は黒い魔人と対峙すると怒りを露にする。

「命は一つだからこそ美しい。人の命を喰らい生き続ける貴様の生は」

ぶつかり合う殺意が街を揺らし、アスファルトの上で砂粒が踊る。

「生に対する冒瀆だ！」

真っ白いロングコートが翻り、体中に巻いたブロックとカラフルなコードが露わになる。手に持ったスイッチのリミッターを外し、躊躇うことなく押した。その瞬間、赤と青の爆風が白い男を吹き飛ばす。

爆発をよけ、電柱の上に飛び乗った男が薄く笑い呟いた。

「クラウン・ザ・ホワイトフェイス……最強の魔人の登場だ」

爆炎の中、現れたのは白い、魔人。額に付いたバイザーを下ろし顔を覆って表情を消すと殺意を込めて吐き捨てた。

「お前は幸福になるな、死して、その罪を償え」

白い魔人のその言葉に黒い魔人は笑う。

「なら貴様は、その生を悔いる。魔人である過ちを」

額を擦りつけ合うほど接近し睨み合う二体の魔人は、内包した怒りと殺意を沸騰させ、青い炎を燃え上がらせる。

額が僅かに触れる、それが開始の合図となった。

火花を上げ、弾かれるように距離を取る二体の魔人。白い魔人は爪を、黒い魔人は拳を、互いに殺意を込めてぶつけ合う。

飛び散る火花と舞う装甲片、互いに距離を取りながら一撃必殺のタイミングを伺う。

白い抜き手をくぐり抜け、黒い魔人は一歩前に出る。それを見越した白い魔人がもう片手の爪で遮るように宙を切る。黒い魔人は踏み込みを止め、紙一重で爪を交わす、が、目測を誤ったか頬の装甲を白い爪に僅かに挟り取られた。

(っ、おかしい)

白い爪を躲しながら、黒い魔人は考える。

(さっきもそうだ、こう)

迫り来る白い爪を紙一重で躲す、が、よけきれず、火花と共に装甲に傷が走る。

(紙一重で躲すとよけきれない。それになんだ)

光を乱反射し、宙を舞う装甲片。

(明らかに俺が与えたダメージの量より多い、何かある)

そう考え、距離を取ろうとした刹那、白い魔人に手を掴まれた。

「遅い」

ガキーンッ！

装甲と装甲の噛み合う音、宙を走る青い火花、それが宙を舞う装甲片に引火して。

ポッ！

黒い魔人の眼前で装甲片が炸裂した。

「がっ！」

そう、隙。張り詰めた時間の中に現れた、一瞬の隙。白い魔人はそれを作り、最大限に生かす。展開する白い魔人の右腕、青い炎を吹き出し、力を凝縮させる。

「暗濁なき幸福を」

そう呟くと掴んでいた手を離し、展開した右腕で黒い魔人の胸を貫いた。

『HAPPINES』

砕け散る黒い装甲、白い腕が胸を貫通し、青い炎が絡まりながら展開した白い腕に吸い込まれていく。

「死して……」

青い炎を右腕に取り込み、勝利を確信した白い魔人が静かに

口を開いた。次の瞬間、黒い装甲の中から漆黒の炎が燃え上がり、貫通していた白い腕をもぎ取った。

「っ！」

咄嗟に飛び退き、白い魔人は黒い魔人から距離をとった。うなだれる黒い魔人からは漆黒の炎が立ち上り、黒い装甲をより深く彩る。

「何が死だ……」

天を仰ぎ、黒い魔人は燃え上がる。

「そんな救いが、俺にあるわけないだろ」

黒い炎が装甲を歪ませ、魔人は姿を変えていく。漆黒の歪んだ魔人は凍てつくような殺気と煮え滾るような憤怒を内包し、狂気じみた笑いを浮かべる。

「来いよ。考えるのはもおやめだ。小細工でもなんでもして、俺を殺してみやがれ」

そう言うのと両手を広げ、白い魔人を招く。もぎ取られた右腕を再生させ、白い魔人は体勢を整えた。

「冒涇の魔人……俺は、お前を！」

一気に加速し、白い魔人は距離を詰めた。微動だにしない黒い魔人に白い一撃が突き刺さる。

「くっ！」

装甲に打ち付けられた白い拳はその威力で自壊し、砕け、細かくなった装甲片が宙を舞う。振り下ろす左手の爪撃は装甲を削ることもできず、爪先が脆く砕け散る。

舞い散る白い装甲片、それを吹き飛ばす黒い一撃が白い魔人の顔面に突き刺さった。亀裂が走り、破片が舞い散るバイザー。

黒い拳はそれを打ち抜き、白い魔人は吹き飛ばされる。

「俺を、どうする？」

白い装甲片が舞い踊る中、黒い魔人は黒炎を上げて威圧する。

「ころず！」

一際大きく吠えると白い魔人は大地を叩き、その反動で宙に舞い上がった。

ガギンツッ！

装甲の噛み合う音と共に青い炎が空中を走る。その炎は白い装甲片を伝い、黒い魔人に襲いかかった。

ポツ！

舞い踊る白い装甲片に反応し、青い炎が火の付いた爆薬の様に一気に炸裂する。

白い魔人は間髪いれず黒煙に飛び込み、姿が確認できない黒い魔人に向かって一撃を放つ。

「なるほど、そういうことか」

白い魔人の一撃が受け止められ、呟きと共に黒煙が風で流される。

現れたのは黒い魔人と伸びた白い魔人の腕。

腕部分の装甲が舞い散り、手首から先、拳部分と二の腕部分を白い骨が繋いでいる。

発火性の装甲と伸縮自在の腕、しかも腕を伸ばす際に周りの



装甲を粉にして宙に舞わせることができる。遠近感と目測を狂わせ、なおかつ必殺につなげられる戦法。

「ネタが割れば、つまらん」

左手で白い魔人を捕まえたまま、黒い魔人は右手に炎を集中させる。

「死んで終われ……DEAD……」

白い魔人は無造作に捕まった右腕を切り離す。切り離された右腕は黒い魔人に絡みつき、青い炎を発して爆発した。

間接的な粉塵爆発ではなく、直接爆薬を身体に巻きつけた状態での爆発。さっきまでの目くらましとは違う集中爆発、しかも右腕一本分だ。ダメージはあるはず。

「END」

黒煙の中から声が出たかと思うと、黒い魔人が何事もなかったかのように黒煙を掻き分けて現れた。

展開し、黒い炎が燃え上がる右腕。

「……さあ、その生を悔いろ」

右拳を握り締めると黒い魔人は殺意剥き出しで白い魔人に襲いかかった。

「魔人噛み」

上空から打ち付ける肘の一撃が黒い魔人の首に突き刺さり、間髪いれず振り上げられた膝の一撃が天を突くように黒い魔人のみぞおちに突き刺さる。

「つつ……てめえ」

勢いを殺され、黒い魔人はその場で立ち止まった。突如現れたもう一体の魔人。

赤黒い装甲に鈍く光る緑の眼、白く長い髪が踊るように揺れている。

「君には、是が非でも退場してもらわないと困るんでね」

「そう言えば、お前もいたな……いいぜ、まとめて食らってやる」

対峙する黒い魔人と二体の魔人。

最初に動いたのは白い魔人、振り上げられた右腕が瞬時に再生、分解し宙に大量の装甲片が舞う。それを掻き分けて赤黒い魔人が真っ直ぐ黒い魔人に向かって突進する。

迎撃しようとした次の瞬間、世界がノイズに支配される。

「ぐっ、があああ！」

全身と脳をシエイクするような共振に黒い魔人は膝をついた。赤黒い魔人と白い魔人も同様に膝を落とす。

『さすがに四体も集まると酷いノイズだな。そうは思わないか、神威』

「……て、めえ……」

見上げた先に立っていたのは、生の色を感じさせないほど真つ青な魔人。

青い魔人は両手を広げ、ゆっくりと黒い魔人に歩み寄る。

「いい共振だ。記憶も、理性も、過去も、現在も、未来すらシエイクするような。そんな感覚。酔いしれるだろ？」

精一杯の力を振り絞り、震える足を抑えながら、黒い魔人が立ち上がる。

「足りねえ、足りねえんだよ。俺は、まだ」

うわ言のように呟く黒い魔人を見下し、青い魔人は薄く笑う。

「そうか、だが、貴様は不要」

そう言うとう右手で黒い魔人の胸を貫いた。いや、貫いたんじゃない。右手が埋まるように黒い魔人の中に入っていた。

「かつ……」

「私は魔人という呼び方が嫌いでね。君たちを使徒と呼びたいと思っていた。だが、このグレイブニールで縛るんだ。魔人の方が相応しいかもね」

そう言うとう青い魔人は黒い魔人の中で、何かを握りつぶした。

その瞬間、一層強いノイズが黒い魔人を襲った。

「がっ、あああああああああああああああああ！」

「ほお、まだ個を維持できるか。面白いな、君は」

「ぐううう、がああ！」

振り解くように右腕で薙ぎ払う。

青い魔人はそれを躲し、黒い魔人と距離をとった。

呻き、赤い泡を吐きながら怒りに燃えた眼で黒い魔人は立ち上がる。

「ぐ、ぐぐぐ、があああああああ」

全身の激痛に歯を食いしばり、両手を開くと、天を仰ぎ、一際大きな声で吠えた。

「があああああああああああああああああ！」

両手をクロスさせ、吠える顔に食い込ませる、そして。

バキーンッ！

砕け散る黒い装甲片。黒い魔人の顔は抉れ、黒い炎が燃え上がっている。次の瞬間、散ったはずの黒い装甲片は逆再生のように顔のあった位置に戻り、新しい顔を構成していく。

その顔の表情は、憤怒。

荒々しく目が釣り上がり、食縛った口は耳まで裂け、鬼のような形相をしている。

「お、おとおお、おとおおとおおとおお」

黒い炎を口の端から吐き出し、黒い魔人は青い魔人を睨みつける。

「怖いなあ、君は。そんな顔じゃ、ツヴァイに嫌われるぞ」

「ガアアアアアアアアアアア！」

怒りと炎を吐き出し、黒い魔人は青い魔人に襲いかかる。

「ぎっ……」

不意に白い腕が空を切り、黒い魔人の動きを遮った。

「死、死し、死して、死してこ、死してこそ……」

傷の付いたCDのように、同じ言葉を繰り返しながら白い魔人がゆっくりと身を起す。顔を被っていたバイザーは共振で崩れ落ち、白い顔が露になる。

笑っている顔、その顔にヒビが入り、ボロボロに崩れて落ちる。

そして現れたのは、この世に絶望するような嘆きの顔。

白い魔人はその顔を掻き塗りながら、大声で叫んだ。

「があ、ああ、ああああああああああああああああ！」

狂ったように、白い魔人が黒い魔人に襲いかかる。

「うるせえよ、てめえ

DEAD……

END！」

展開した右腕に黒い炎を集め、飛びかかってくる白い魔人に向かつて突き立てる。

黒い魔人の一撃が白い魔人の腹を打ち抜いた。

「死し、死し、死！」

壊れたように呟く白い魔人、黒い魔人はその嘆きの顔に手をかけると側頭部に爪を突き刺し、力任せに剥ぎ取った。

「が、がああああああああ！ 僕の、僕の顔、僕の顔お！」

剥ぎ取った嘆きの面を無造作に地面に叩きつけ、黒い魔人は青い魔人に向き直った。

青い魔人の周りに浮かぶ小さな弾丸達……あれは。

そう考えた瞬間、青い魔人は手を黒い魔人に向けた。

刹那、大量の弾丸が黒い魔人に突き刺さる。

「ぐ、が、ああああああああ！」

強烈な共振に、黒い魔人の意識が乱れる。

「さあ、終わりをはじめよう！」

意識が混濁し、青い魔人の言葉がノイズに消える。

全てが消える。

俺が……。

俺の存在が……。

暗転

砂嵐吹き荒ぶ中、神威は瓦礫に寄りかかり座っている。膝には寝息を立てるブレイン1。神威は優しくブレイン1の頬を撫で、薄く笑う。その微笑みに狂気の影はなく、慈愛や慈しみに溢れていた。

ブレイン1を下ろし、神威は立ち上がる。

砂嵐の向こう、鈍く光る赤い眼、巨大な影。ゆっくりと近づいてくるそれは、まるで何かを求めるように真っ直ぐこちらに向かってくる。

「君も、欠けているんだね」

砂嵐が裂け、巨大な機械のドラゴンがその姿を現す。

電子地図の警告アラームがけたたましく鳴り響き、123の数字を表示し続ける。

神威は電子地図を握り潰し、その場にばらまくと両手を広げ「変身」と呟いた。

両手両足が黒い魔人に変わり、装甲から白い炎が吹き出す。

右手を構え、装甲を展開させると、神威は優しく呟いた。

「あるべき楽園へ」

大地を蹴る黒い脚、空を裂く黒い爪、大気を焦がす白い炎。そんな凶悪なものを振りかざす神威の顔はどこか寂しげに見えた。

「PARADISE LOST!」

白い一撃が砂嵐をかき消し、機械のドラゴンを貫いた。

降り注ぐ破壊された機械の雨。

その向こうから迫り来る、リスカの群れ。

神威は右手に纏った白い炎を振り払い、その群れに飛び込んだ。  
失われた楽園。

僕は、何処？

暗転

まとわりつく息苦しい闇を抜け、神無は闇の中から、四方を闇に囲まれた部屋に出た。

暗いじやなく、黒い部屋。

その真ん中で少年が膝を抱えている。

「僕を……」

呟く声に引き寄せられ、神無は少年の後ろに立った。

「僕を……罰……僕……」

次第に大きく、ハッキリと聞き取れるようになる呟き、肩に手をかけようと手を伸ばした、次の瞬間、少年は振り返り、神

無に飛びついた。

少年の顔は、闇。

振り取られたように顔全体が無くなっている。その顔の闇の奥から怒るような、縋るような声が響く。

「僕を罰してよ、僕を罰してよ!」

少年の闇は広がり、再び神無を深淵へと誘った。

暗転

僕は、誰だ？

白い部屋を赤く染めて、僕は一人、天を仰ぐ。手にしているのは血で染められた一本のナイフ、白い仮面は赤く濡れ、白い服も赤く滲んでいく。足元に倒れている少年、君は誰だ？ 何も分からない。

そう、僕が何者なのかさえ。

繰り返している。

色の無い部屋で、何度も何度も何度も。

時にナイフ、時に銃、時に剣、時に鈍器。

手を変え、品を変え、やり方を変え、殺し方を変え。

ただ淡々と繰り返している。

僕は、死なない。

ただ、淡々と殺す。

殺す、殺す、殺す。

何時しか、この無表情の仮面が、僕の顔になっていた。

温もりを感じても、何も響かないよ。

感じる温もりは、最後の温もりだから。

白い部屋で、今日も膝を抱える。

指示があるまで待機、それが僕の日常だ。

この地獄には時間の感覚はない。

あるのは不自由と。

『X・10……今日は、赤だ』

その声に導かれ、僕は赤い無針注射器を手に取り、右手に押し付ける。中の液体がみるみる減り、冷たい感覚が右腕に広がる。

目の前の扉が開かれ、白い部屋が広がる。そこに佇む白い人影、表情のない仮面に白い服、手には鎌を持っている。こちらの部屋には武器は置かれていないということは徒手で戦うということか。

そう、あるのは不自由と。

小さく熱い息を吐く。

殺戮への高揚。

そして、空っぽの罪悪感だ。

血に塗れた死体を見下ろし、小さく息を吐く。

いつまで続く？

いつになったら終わる？

両手から滴る混ざった鮮血に虚しさを感じた。

僕は、誰だ？

暗転

繰り返す日々と繰り返す投葉、薄れゆく現実味の中で僕は彼女に出会った。

そう、気まぐれだった。

不自由に徹し、慣れていたあの日。

僕は鍵のない部屋にいた。

何千人かの骸を積み上げ、僕は塔の上部にいた。

歩き回る自由と、部屋から出る自由を得ても僕は不自由だった。

そんな日常の中で、彼女に出会ったんだ。

時を刻むデジタル時計を見上げ、膝を抱える、そんな日常。

僕はふと、窓の外を見た。

窓から見えるのは空中庭園の一廓。

そこで僕は彼女を見つけた。

黒い艶やかな髪に、吸い込まれるような赤い眼、透き通る白い肌、緑の中で一際目立つ赤い服を着た少女。心を奪われたかのように、僕は少女に見入ってしまった。それに気づいてか、少女と目が合う。

僕の顔を見て、少女が微笑んだ。

その瞬間、僕の世界に色が付いた気がした。

「貴方、名前は？」

「X - 10」

「それは形式番号、貴方の名前じゃない」

「名前？ 名前……」

「ないの？」

「……うん」

「じゃあ、貴方は、『イオ』」

「イ……オ？」

「そう、10いちじゅうだから、イオ」

「イオ……僕は、イオ」

「そう、よろしくね、イオ」

差し伸べられる白い手の向こうで微笑む少女。その手をとった瞬間、僕は生まれた。僕が、イオとして。この手は、沈み、息を殺していた僕を暗いまどろみから引き上げた。

君が僕を、僕にしたんだ。

この地獄で、君だけが僕を知っている。

君だけが、僕の全て。

彼女と出会い、イオの名を得て、僕は生まれた。

全てに色が付いて、全てが充実していて、何もかもが幸福だった。

そう、こうやって人を殺している時も。

毎日決まった時間に行う殺し合い。

この白い部屋を、何度も何度も赤く汚す。

ああ、なんて幸福なんだ。

僕の地獄に、こんな感覚があつたなんて。

この無表情な仮面の奥で、僕は上手く笑えているだろうか？  
滴る鮮血のリズムで僕の中に何かが満ちていく。  
その感情を、僕はまだ知らない。

#### 暗転

君が笑った。

(僕は、僕は)

流れる水の音。

暗い部屋で一人、少年は洗面所に向かっている。

一心不乱に手を洗う少年。

(違う、僕じゃない。違う、違う、違う、違う！)

血に染まった両手が、さっきまでの惨劇を物語る。

(僕は殺してない。僕じゃない、僕じゃない、僕じゃない！)

この手は奪うだけの手じゃない。

あの子の手のぬくもり。

それを、この血の気持ち悪い温もりがかき消そうとしている。

(嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ！)

一心不乱に手を洗う。

半泣きになりながら、己の行為を否定しながら、俯く少年を鏡だけが見詰める。

鏡の中の少年が不意に顔をあげ、不敵に笑った。そうだ、殺したのは、『俺』だよ。

暗転

「君の名前は？」

「私？ 私はアイン」

「アイン？」

「そう、アイン。1つて意味よ」

「アイン……アイン。いい名前だ」

僕がそう言うと、彼女は微笑んだ。

不意にノイズが走り、微笑みをかき消していく。

ああ、そうだ。

夢の時間は終わり、現実の時間だ。

デジタル時計が零になり、眼前の扉が開かれる。

そこに立っているのは僕と同じ顔の少年。

口角を歪めて笑い、僕を呼んでいる。

赤く染まった部屋。

中には無数の骸が転がり、死の静寂が場を支配している。

「さあ、来いよ、イオ」

「名を呼ぶな、その名を呼んでいいのはアインだけだ」

そう、そうだ。

アインだけだ。

アインは光、僕を照らす光だ。

アインが僕を僕として映し出す。

光。

光は僕を照らし、闇をより深くする。

一瞬で距離を詰め、僅かに反応した少年の胸を、僕は抜き手で貫いた。

で貫いた。

「かっ……かはっ……」

肺が潰れ、咳き込むように空気と血を吐き出す。

「……イ……オ……」

ノイズ混じりの聞きなれた言葉に、僕は顔を上げる。

ノイズのかかった少年の顔。ノイズは次第に晴れ、少女の顔が露わになる。

が露わになる。

「ア……イン……」

血。

赤い、血。

「あ、ああ、あああああああああああああああ！」

僕の地獄で。

僕は……誰？

べつとりと付いたアインの血に僕は何を感じたんだろう。

この温もりに、僕は……安心、している？

## 暗転

「どうしたの？」

空中庭園の真ん中でアインは僕に声をかけた。

「ちよっと、寝不足なんだ」

欠伸を噛み殺しながらそう返す。

毎夜見る夢。

アインを殺す夢。

安心する自分に困惑し、それを恐れながら、僕は眠れない日々を過ごしていた。

「そう、じゃあ、これなんてどうかな？」

アインはそう言っつて白衣のポケットからカプセル入りの小瓶を取り出す。

「不眠症って感じじゃなさそうだし、精神安定剤。ほら、私、こんななりでも科学者だから」

そう言っつて、アインは微笑見ながら小瓶を差し出す。僕は疑うことなく小瓶を手にし、中のカプセルを取り出して口に放り込む。

「毒かもよ？」

微笑みながらアインが言う。

「それならそれがかまわないさ」

僕も微笑みながら答えた。

その夜は不思議と夢は見なかった。

いや、その夜だけじゃない。

僕はそれから、夢を見なくなった。

不安も安堵も、恐怖すら、僕から消えていった。

僕は……。

## 暗転

僕は約束したとおりに空中庭園に佇んでいた。

入口からアインが駆け寄ってくる。

そして、無言で僕の手を取ると、どこかへと引っ張っていく。

僕はなすがまま、彼女の後をついて行っつた。

いくつかの立ち入り禁止区域をくぐり抜け、一つの扉の前で立ち止まった。

「イオ、ここ、私の、ラボ」

「うん」

「私の事、好き？」

「え？」

突然の問いに面食らっつてしまう。

「答えて」

真剣な眼差しに、僕は首を縦に振った。

「好きだよ」

微笑み、そう答えると、アインの表情が和らいだ。

「何千、何万、何億と実験を繰り返してきたけど、貴方ほどの



人なんていない」

カードキーで扉を開け、僕を部屋へと誘う。

「イオ」

後ろに立つアイン。

振り返ろうとしたその瞬間、背中に激痛が走った。

肩越しに深々と突き刺さったナイフと、それを押し込むアインの姿が見える。

「イオ、愛してる」

その呟きに、僕は微笑んで答えた。

「僕も、愛してるよ」

僕はそのまじ意識を手放した。

アインが何か言っているが、何も聞こえない。

そう、これは夢。

僕の願望。

僕は君に、殺されたい。

君に開放して欲しかったんだ。

この地獄から。

目覚めたら、僕は自分の部屋のベッドの上にあった。

そう、夢。

僕は、君を。

暗転

今日も扉が開く。

目の前に立つのは笑う面をつけた少年。

僕は素顔で彼の前に立つと心を殺す。

この手は、僕の手じゃない。

この足は、僕の足じゃない。

この殺戮は、僕じゃない。

ここに居るのは僕じゃない。

『GO』

電子音声の合図で一気に間合いを付ける。

それに反応し、飛び退こうとした少年の胸元をつかみ、仮面に頭突きを叩き込む。

仮面の少年は怯むことなく僕の手を掴み、顔に頭突きを返してくる。

僕と仮面の少年が同時に手を突っぱね、二人は距離をとった。

僕じゃない、僕じゃない、僕じゃない。

鼻からこみ上げる鮮血の温かさに、僕は自己否定を繰り返す。

僕じゃ、ない。

その瞬間、何かが切り替わった。

それから先は覚えていない。

ただ、殴った拳の痛さだけが、骨にこびりついて取れなかった。

少年のしていた仮面のように。

明日アインと会うとき、僕は上手に笑えるだろうか？

それだけが不安だった。

暗転

運命の日は、いつも唐突に訪れる。

用意や準備すらできないほど、日常に溶け込んで。

普段鍵のかけられている外出用の扉が開け放たれる。

差し込む光に目を細める。

その光の先に立っていたのは荒く息をつくアインだった。

「イオ、来て！」

そう言つて扉の外からアインが手を差し伸べる。僕は急いで立ち上がり、その手を取った。

これが最後になるとも知らずに。

アインに手を引かれ、僕たちは塔の中を走った。同じような景色の連続で、僕にはどこを走っているのかわからなかったが、道案内のアインを深く信じていたので不安はなかった。

塔本体を出て、幹と呼ばれる通路を駆け抜ける。

アインは随分焦っているようだが、一体どうしたんだろう？

ふとそんなことを考える。

幹の端、一つのドアの前でアインは立ち止まった。

「……イオ」

「？」

「ここから出たら、私たちは自由よ」

「そうか」

「ここから出ても、自由になっても、ずっと私の傍にいて」  
 搾り出すアインの声が震えていた。

「うん、ずっと傍にいるよ」

「ずっとずっと傍にいて！ 私だけを見て！ どこにも行かないで！」

「どこにもいかない、ずっと君の傍にいる、だからアイン、泣かないで」

僕は微笑みながら優しくアインに語りかける。

「安い芝居だな。泣けやしねえ」

不意に声をかけられ、僕は来た道を振り返った。そこに立っていたのは、僕と同じ顔をした少年。

これは？ 夢……なのか？

「—————！」

アインが少年の名を叫んだようだが、頭の中のノイズが酷く  
 て聞き取れない。

少年は右手に持った黒い銃をゆっくりと上げてアインに照準  
 を合わせる。

口角を歪ませて笑うと、三度引き金を引いた。

残響が木霊する静寂。

廊下に鮮血の赤い水溜まりが広がる。

打ち出された三発の銃弾は立ちほだかった僕の腹と胸に突き  
 刺さり、アインに届くことなく止められた。

「イオ！」

「大丈夫。僕が守る」

続けて二発の銃弾が僕の身体に突き刺さる。

貫通はさせない。

体に力を入れて体内で弾丸を止める。

後ろでアインがパネルを操作し、扉を開けた。そして、僕と

アインは部屋に入るとすぐに扉を締め、新しいパスワードで扉をロックする。

「イオ！ イオ！」

「大丈夫だよ、アイン」

心配そうに声をかけるアインに僕は微笑みながら答える。

大丈夫、僕は、大丈夫だ。

アインを守る。だから死なない。

そう言い聞かせて、僕は離れゆく意識を無理やりつなぎ止める。

「地上降下用のエレベーターを起動させて、この部屋をパージする。それで時間が稼げるはず。イオ、少し待ってて」

アインはそう言うのと壁にある端子に電子地図を繋ぎ、ホログラムキーボードを操作し始める。

その姿を後ろで見ながら僕は優しく微笑んだ。

急速に広がる足元の血溜まり。熱は奪われ、意識が薄くなつていく。

ダメだ、まだ、ダメだ。

体が鉛のように重くなり、眠るように意識がブラックアウトする。

僕は、僕は……。

次に目を開けたとき、アインは泣いていた。

僕に跨り、胸に突き刺さったナイフを両手で押さえながら、

アインは泣いていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

繰り返し何度もアインが謝る。

泣かないで。

その言葉が口から出ない。

身体は重く、手を挙げることさえできない。

君の涙を拭きたいのに……。

扉が開けられ、僕と同じ顔をした少年が部屋に入ってくる。

そして、泣いているアインの隣に立つとゆっくりと黒い銃口をアインの頭に向けた。

やめる、やめる、やめる！

無慈悲に引き金が引かれる。

横に倒れるアイン、口角を歪ませ笑う少年、落ちる空葉莢。全てがスローモーションに見えて、僕の中で何かが壊れた。

「ああああああああああああああああああああああああああああ！」

燃え上がる青い炎。

腕を振り上げるとそれは黒く染まった怪物の腕で黒い銃と共に少年の腕を吹き飛ばす。

立ち上がるうとしたその瞬間、床が力を失った。

崩れゆく床と浮遊感が僕を襲う。

アイン！

崩れる床の向こうにアインを捉える。

アイン、アイン、アイン、アイン、アイン！

届かぬ手を必死に伸ばす。

絶対に、絶対に！

なんども宙を切り、瓦礫に遮られて、それでも、なお、なお。

アイン！

僕は、アインを、守れなかった。

### 暗転

壁……いや、床だ。

ゆっくりと目を開け、気だるく起き上がる。

何処まで沈んだのだろうか？

床以外認識できない闇の中で、神無はゆっくりと立ち上がる。

ここは、底か？

頭を軽く振り、ノイズを追い出す。

頭に情報が入りすぎたか、軽く混乱している自分に気付く。

俺は、俺は。

額に手を当て考えていると、前から人影が歩み寄ってくるこ

とに気づいた。

「やあ、久しぶり。いや、こうやって会うのは初めてだから、はじめましてかな」

影が揺らめき優しく微笑む。

「はじめまして、僕が、イオだ」

闇の中から現れた男。両眼、両耳を四本の腕で塞ぎ、微笑を

浮かべながら、ただ佇んでいる。

「イオ、俺はあんたに」

「何も言うな、神無。君は十分苦しんだ。ここで安らかに眠る

といい。静かで、誰も傷つけにこない、ここで」

諦めを帯びたその言葉に、神無は激情する。

「静かだと？ あんたにはこの声が聞こえないのか！ あんた

を呼ぶこの声が！ ずっとずっと呼んでるだろ！ 俺達じゃな

い、あんただけを！」

その言葉に、イオは静かに答える。

「聞こえないな、僕には何も。そして、何も見えない。だから

ここにいます。今までも、これからも」

静寂。

憤りを押し殺しながら、神無が口を開く。

「ずっとここにいますつもりか？」

「もちろん」

「俺は、ここから出る。助けたい奴がいるんだ。でも、俺の力じゃ助けられない。だから」

「君のかわりに助けに行けど？」

「違う。俺が助けなきゃ意味がないんだ」

「じゃあ、どうしろと」

「その両目両耳を塞ぐ腕をくれ」

「！」

神無の言葉にイオの顔色が変わる。

「俺じゃ助けられない。だから全てから逃げるための腕を俺にくれ！ それがあれば何食わぬ顔で大事な誰かを見捨てられるんだろ！ 今の俺には出来ない、だからその腕をくれ！」

「違う……僕は」

「違わない！ あんたは見捨てようとしている。助けを呼ぶ声を遮り、現実を見ようともせず、ただ、自分と言う殻の中に閉じこもって逃げているだけだ！」

「違う！ 僕は！」

膝を落とし、イオは震えながら言葉を絞り出す。

「怖いんだ、また失うことが。奪われることが」

「わかっている。俺だって怖い。でもな」

奪われたままじゃ終われねえだろ！

奪われて悔しいなら取り返せよ！

あんたのその手は逃げるための腕じゃない。 あんたを呼ぶあの子の手を握るための腕だ！ そうだろ？」

「僕が、再びアインの手を」

「取りに行こう、俺も一緒に行く」

そうやって神無はイオに手を差し伸べた。

覆っていた四つの腕は砕け、イオは神無の手を取る。

「行こう、俺達は全員で一人なんだ」

神無が不敵に笑う。

「ああ、行こう。全て取り戻すために」

イオも不敵に微笑んだ。

闇

「ヤバイな。減りすぎだ」

テレビを見ながら神威が爪を噛む。

その背後の闇から神無とイオが這い出した。

「遅かったな神無。余計なものも連れてきたみたいだが、まあいい。これ以上時間はかけられねえ。とつとと終わらせるぞ」

神威はそう言うのと立ち上がり神無たちと対峙する。眼の奥に燦る狂気と燃え滾るような殺意が闇を一層濃く深くする。

臨戦態勢に入ろうとする神無を遮り、イオが神威の前に立つた。

「君は僕の過ち。僕が決着をつけよう」

過去に対する断罪と後悔を背負い、イオは真つ直ぐ神威を見つめる。

「いいぜ、ぐちゃぐちゃに潰してやるよ！」

爆発するように駆け出す神威とそれを迎撃するように構える

イオ。二人は青い炎に包まれ、ぶつかり合う。

激突し青い炎が散り、中から出てきたのは二体の黒い魔人。禍々しく怒りに至んだ神威の魔人体と不気味なほど穏やかな顔をしたイオの魔人体。

ぶつかりあった腕を突き、距離をとると二体は同時に右腕を展開させた。進む白い炎と黒い炎。腕を振り上げ、二人が叫ぶ。

「その生を悔いろ！」

「あるべき楽園へ！」

右腕の炎が燃え上がり、闇を焦がす。

二人は腕を振りかざすと相手に向かって駆け出した。

「DEAD END！」

「PARADISE LOST！」

白い炎と黒い炎がぶつかり合い、闇はその姿を失った。

闇無き部屋に訪れた静寂。

白い煙が晴れ、中から現れたのは右腕を失った二体の黒い魔人。

「ちっ、同じ力だ、埒があかねえ」

「二対一だよ。完全に消してやる」

「消せば無かったことに出来るとでも、思っついていやがるのか？」

「思っついていないさ、お前に着せた罪もお前が犯した罪も、僕が背負ってやる」

「ありがたくて、涙が出るなあ！」

黒い炎を放出して神威が猛る。

消え去ったはずの闇を呼び、吸収して神威が膨れ上がる。さながら外で暴れる魔獣のように。

黒い炎を燃え上がらせ、闇を全て飲み込み、神威は巨大な黒い魔獣へと変貌した。

「俺の力、俺の怒り、俺の狂気……全て、俺の物だ！」

世界を震わせるほどの殺気を孕み、黒い魔獣は叫び狂う。

その叫びに圧倒されながらもイオは右手を再構築させて身構えた。

対峙する魔獣と黒い魔人、その間に神無が割り込む。

「神威、あんたは何が欲しい？」

その問いに、神威は迷うことなく答える。

「身体だ、この身体、俺にくれよ！」

「悪いが、それは出来ない。だが、俺は戦い奪い合うつもりはない」

神無はそう言うとき青い炎をまといて魔人体に変身する。

「俺達は三人で一人。一人の、人間だ」

青い炎が一面に広がり、闇を照らしていく。

「怒りも、憎しみも、狂気も、罪も、悲しみも。後悔も、渴望も、喜びも、罰も、愛しさも。殺意も、魔人も、希望も、闇も、恐怖でさえ、一緒に持って、歩いて行こう」

イオは薄く笑うとき青い炎に溶け、神無に重なる。黒い魔人の半身から白い炎が溢れ出し、無表情だった目に安らぎが灯る。

「俺は自由が、身体が、俺自身が欲しいんだよ！」

黒い炎を燃え上がらせ、魔獣は腕を振り上げる。  
神無は両手を展開すると青い炎と白い炎を纏わせ、魔獣に向  
かって走る。

「神無あ！」

「神威い！」

青い炎と白い炎が黒い魔獣を貫く。

「LOST HEAVEN」

魔獣が砕け散り、神威の本体が力無く床に落ちる。

その近くに着地し、神無は魔人体を解いた。

イオと混ざり合ったことを示す黒と赤のオッドアイで神威を  
見下ろす。

神威は横たわり、自嘲気味に笑った。

「神無だけだったら容易く乗っ取れると思ったんだがな」

「悪いな、神威。この身体はまだやれないんだ」

「ちつ、まあいい。さあ、消せよ。俺は、所詮イオの模造品だ  
からよ」

「違う」

「あ？」

「お前は神威だ、イオの代用なんかじゃない」

そういうと神無は神威に手を差し伸べた。

「行こう、俺達は三人で一人だ。今までもそうやってきたじや  
ないか」

「ふつ、ははは、後悔すんなよ」

笑いながら神威が神無の手を取る。  
青い炎に溶け、神威が神無と同化した。  
白く染まった髪と赤黒のオッドアイ。  
イオであり、神威であり、神無である。  
そう、これが。  
俺達の答えだ。

そう、いつだってそう。

醜く争って、共倒れして、神にすがりつく。

脆くて、壊れやすくて、儂い。

私はそんな人間が、大嫌いだっただ。

あの英雄を目にするまでは。

#### 第四節 Believe Yourself

「くそっ！」

瓦礫から這い出し、ガイアは悪態をつく。

「怪獣大戦争かよ」

力なくうつ伏せに寝転がるガイアの首元を固定するように、

二股の剣が突き刺さる。

「！ ヤハヴェ！」

見上げると片手で剣を押さえ、ガイアを見下ろすヤハヴェがいた。

「静かにしてもらおうよ。ここからは、関係者以外立入禁止だからね」

「くっ、てめえ！」

「身体とお別れ、したくないでしょ？」

その言葉の冷徹さにガイアは歯嚙む。

「さあ、ジュリエットの入場だ」

大気を揺らしてぶつかり合う黒い魔獣と巨大な機械のドラゴン、そのすぐ近くの建物上で、青い炎が燃える。

青い魔人、斐文。

青い魔人は炎を振り払うと、装甲の隙間から鮮血を迸らせ、天を仰ぎ吠える。

それに呼応するようにドラゴンは黒い魔獣をはじき飛ばした。巨大なドラゴンは吠える青い魔人の方に振り返り、大きく口を開けると頭から魔人を飲み込んだ。

ドラゴンの口から青い炎が溢れ出し、その身体を青く染めていく。

青く染められたドラゴンは関節部から青い炎を迸らせ、黒い魔獣にぶつかっていった。

激突した次の瞬間、世界を揺さぶるほどの共振が辺りに響きわたり、瓦礫の街を崩していく。

少し離れた建物の上で包帯の男、×一が口角を歪ませる。

「嫌な雑音だ。グレイプニール……さあ、123号、お前はどんな世界に改竄する？」

吠えるドラゴンと黒い魔獣、その声が響き合い、混ざり合い、世界を揺らす。

その声に混じって、真つ直ぐ神無に向けられた斐文の音が響く。

「神無！」





そう、私は人間が大嫌い。

だから、なんの感情も持たないの。

仄かに青白く光る不気味な部屋で、少女は一人キーボードを操作する。部屋の壁に敷き詰められた無数の水槽。その中には無数の赤子が眠るように丸まっている。

一つの水槽についたプレートに刻まれた文字『X・10』

そう、ここはX No.の製造所。

それを取り仕切るのがこの少女、ブレイン1。またの名をアイン。

弄ぶ者、アイン。

そう、私は人間が大嫌い。

だから、壊すの。

暗転

あの英雄を憶えているものは少ない。

ある者は愚者だといひ。

ある者は弱者だといひ。

だが、私はあの英雄が大好きだった。

人間を守ろうと悩み苦しみ裏切られ、揺らぎ怒り泣き叫ぶ。

そんな英雄を私は画面越しに愛していた。

だから私は作るのだ、命を。

その英雄のデータを元にして。

英雄のコピーを。

X No.を。

だが実験は上手くいかなかった。

第一期は三体を残して全滅。

その三体も英雄とはなり得るものではなかった。

だから私は第二期に賭ける。

第一期の過ちを教訓とし、数を増やして選別する。

それがこの、X・1 No.

最強だったX・1をベースに改良した素体。

この一万体の中から私は英雄を作る。

何体犠牲にしても、必ずね。

暗転

彼を見たとき、私の心はときめいたと思う。

最初の選別で数減らしをしていたとき、私の目は彼に止まった。無表情な仮面をした彼に。

彼の動き、それはデジャビュを感じさせるものだった。

何度も見た動き。

そう、今と同じ画面越しに見た動き。

心奪われた英雄に酷似した動き。  
見つけた。

彼こそ模造品、英雄のコピー。

ついに作り出した。

思わず緩む口角を手で隠し、私は画面に見入った。

次々と相手を倒す彼は画面の向こうでリスカを倒していた英雄と同じように感じる。

私は、手に入れた、英雄を。

暗転

『研究熱心だな』

声をかけられ、私はため息をつく。

「生きる意味だからね、マジにもなるわ」

『そうか』

男は軽く笑うと近くの椅子に腰をかける。

私は振り向くことなく作業を続ける。

『実は頼みがあつてきたんだ』

「嫌よ」

『話ぐらい聞いてくれよ』

「私は忙しいの。冗談に付き合う暇はないわ」

『随分熱心だな。モルモット相手に』

「彼は、違うわ」

『違わないね。今まで画面越しにくぐり殺していったもの何ら変わらない。弄って、殺すだけだ』

「……………」

『自由が欲しくないか？ そのモルモットに会わせてやってもいいんだぜ？』

その言葉に、私は振り返った。

男は闇の中でうつすら笑う。

「貴方にそんな権利……………」

『あるさ。俺は塔の管理者だ。故に、俺にしかない権利だ』

「……………条件は？」

『命の果実』

暗転

初めて目があったとき、私は微笑みかけた。

それが最良だと知識で知っていたからだ。

対面したときも私は笑った。

笑顔は警戒心を解くと知っていたからだ。

そうやって私は彼の心に気になるような小さな傷を作った。

込み上げる吐き気を隠しながら。

笑顔なんて大嫌いだった。

偽りで、欺瞞で、嘲笑で。

こんなものを顔に貼り付けるぐらいなら、仮面の方が百倍マ

シだと思っていた。

でも、違った。

貴方が笑ったら、吐き気はなくなっただんだ。

貴方が触れたら胸が熱くなっただんだ。

貴方に見詰められたら……。

変わっていく自分を感じた。

だから、恐れた。

貴方の背にナイフを突き立てる。

麻酔を固形化させたナイフが貴方の意識を奪う。

私は、私は。

貴方に手を加える。

英雄として、ではなく、イオとして生きてもらうために。

死なないように。

失わないように。

自分の為に、貴方を変える。

そう、そうよ、私はそう。

弄ぶ者。

変わるなんて、嫌、怖い。

私は、永遠にこうやって生きてきたの。

私を、変えないで。

暗転

『できたか、ブレイン1』

急かす声に、私は振り返らず答える。

「ええ、出来たわ。これが、器よ」

そう言って一本のナイフを机の上に出す。

『器？』

「そう、生命の器。無尽蔵に命を取り込み、還元する力を持つもの。これは試作品、今まで失ったX No.の命が入っているわ」

『そう、か。命の上乗せをするってことか』

『それが望みだったと判断したわ』

『ふふ、惜しいな。私の望みは、不死だよ。まあ、近いことができそうだがね』

「不死？ 次の素体はできているはずだけど？」

『代わる気はないってことだ』

「記録者が不死になつてどうするの？ 神にでもなるつもり？」

『必要とあらばな』

『ついていけないわ』

『ついてくる必要はないさ。君はもう、用済みだ』

「制約。私を殺せないこと、知っているでしょ？」

『ああ、だから眠ってもらおう。ドライのようにな。そうだ、眠る前に一仕事、X No.の破棄だ。あれはもういらぬ。君も期待の結果を得られなかっただろ？ おままことはやめて、すべて命に変換してくれないか？』

笑いながら話す男は扉の前から移動し、影る椅子に腰をかける。

「……………お断りよ」

暫しの沈黙の後、私はそう言うと言機の上に置いたナイフを手  
に部屋を飛び出した。

私は、何をしているのだろうか？

ただ夢中で走っていた。

どこに？ 何故？

わからないことだらけだ。

でも、一つだけ分かることがある。

それは。

恐怖。

失うということ。

今まで感じたことのなかった感情。

11<sup>11</sup>は間違いないくやる。

全て奪う。

私はそれに、いや、イオを失うことに、恐怖している。

私は、私は。

気がつくとも私は扉の前に立っていた。

イオの手を引き、無我夢中で走って。

「……イオ」

重く口を開く。

「？」

「ここから出たら、私たちは自由よ」

自分に言い聞かせるように私はイオに言った。

「そうか」

特に感情なくイオが答える。

「ここから出ても、自由になっても、ずっと私の傍にいて」

思いがけない言葉が私の口から出る。

「うん、ずっと傍にいるよ」

即答。

イオは、まっすぐ私を見つめてそう答えた。

「ずっとずっと傍にいて！ 私だけを見て！ どこにも行かないで！」

押し殺していた感情が、知らなかった感情が、知ってしまった  
思いが知っている言葉になって溢れ出す。

「どこにもいかない、ずっと君の傍にいる、だからアイン、泣かないで」

イオは優しく微笑み、私の頬を撫でた。

「安い芝居だな。泣けやしねえ」

不意に声をかけられ、私はイオ越しに来た道を見る。

そこに立っていたのは、イオと同じ顔をした……………。

「X1！」

X1は右手に持った黒い銃をゆっくりと上げて私に照準を合わせる。

口角を歪ませて笑うと、三度引き金を引いた。

そう、わかっていた。

こうなること……。

イオが自然に私の盾になり、銃弾をその身に受け止める。

「——イオッ！」

「大丈夫。僕が守る」

続けて二回、銃声が鳴り響く。

私は扉の横にあるコントロールパネルを操作し、扉を開ける。

そして、イオを部屋の中に入れてみると扉を締め、新しいパスワードで鍵をかけた。

「イオ！ イオ！」

床に横たわるイオにかけより、私は何度も名を呼んだ。

「大丈夫だよ、アイン」

イオは優しく微笑むが、その顔に血の気がない。

早く、早くしないと、イオが。

「地上降下用のエレベーターを起動させて、この部屋をページする。それで時間が稼げるはず。イオ、少し待ってて」

私はそう言うと言と壁にある端子に電子地図を繋ぎ、ホログラムキーボードを操作し始める。

早く、早く！

焦れば焦るほどうまくいかない。

なんで、どうして。

私は頭脳で、知識で、天才で。

なのに、なんで、なんで。

永遠のように感じたシステムの構築から解放され、私はイオに声をかける。

「イオ！」

……………。

「イオ……………」

そんな、ねえ、嘘でしょ。

「…………イオ」

床に広がる血だまりの真ん中で、イオは冷たく横たわっていた。

「イオ……………」

力なくへたりこむ。

触ると冷たく、息もしていない。

死、死だ。

何度も見てきた、与えてきた、知っている。

死だ…………。

なんで…………私…………。

「何も言っていない！ 何も伝えてない！ 何も！ 何も！」

私は貰ってばかりだった。

この思いも、この感情も。

貴方がいたから、私になれた。

貴方がいない世界なんて…………。

ふと、命の果実が頭を過ぎる。

懐からナイフを取り出し、私は思考を巡らせる。

これがあれば、イオを蘇らせられる。

イオ、イオ、イオ、イオ！

私は今、罪を犯そうとしている。

大罪、生命の冒瀆。

それでも私は。

ナイフを振り上げ、イオの胸めがけて一気に降り下ろす。

私の気まぐれで生み出し、私の思いで再びこの地獄に呼び戻す。

私は、許されるだろうか？

イオは私に、ほほ笑みかけてくれるだろうか？

こうやって、また、苦しむことを強要する私に。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

何度も何度もイオに謝る。

私は、私は。

罪でもいい。

罰もうける。

恨まれたっていい。

嫌われたってかまわない。

でも、お願いだから。

生きて！

一瞬、眩暈にも似たノイズが頭の中に走る。

誰かの記憶。

アイン？

神無の中でイオは押し黙り、言葉を発しない。

『接触したな』

神威が口を開く。

『来るぞ』

そういった次の瞬間、闇を引き裂くような共振が響きわたり、覆う闇に亀裂が走る。

そして、その向こうから斐文が現れた。

天井を突き破り、光に捕らわれながら斐文は精一杯俺に向かつて手を伸ばす。

「神無っ！」

呼ぶ声に、神無は答える。

「斐文っ！」

神無は力一杯手を伸ばした。

絡みつく闇を引きちぎり、斐文に向かって手を伸ばす。触れる……その瞬間、神威の言葉が頭を過ぎった。

『後悔すんなよ』

神威の過去がフラッシュバックする。

(俺は……この手で……斐文を傷つけるんじゃないか？)

その一瞬の迷いが、神無と斐文を引き裂いた。

割る闇と光、そして、斐文。

神無の手は斐文を掴むことなく、宙を切る。

砕け散る闇のむこう。光が広がり、そこには瓦礫と廢墟に彩られた街が見えた。宙を舞う黒い装甲片。黒い魔獣は砕け、神無という存在だけが宙に放り出された。黒い魔獣が砕けた衝撃で、弾かれ、崩れ落ちる機械のドラゴン、その中で落ちる斐文を、神無の目は捉えた。

不意に神無の上に影が落ちる。

宙を舞うサイドカーを備えた大型二輪。その上で細目の女性が巨大ボウガンを構え微笑む。

「確保だ」

サイドカーに座っていた女性がそう言った次の瞬間、ボウガンから放たれた無数の槍が神無の身体を貫き、地面に叩きつけ、礫にした。

サイドカーを携えた大型二輪は落下するように着地し、サイドカーに乗っていた女性は空中で飛び降り、神無の頭を踏み付ける。

「ぐ……斐文」

踏みつけられ、顔を上げることできない。

神無は、この一瞬の迷いを、永遠に後悔するだろう。



「ふむ、騎士団がとったか」

ヤハヴェはそう言うと突き刺した剣を抜き取り、ガイアを開放した。

「ヤハヴェ……お前は」

何かを言おうとするガイアにヤハヴェは口角を歪めて笑う。

「どっちでもいいんだよ。俺は」

弾かれ、粉々に砕けた機械獣の破片、その真ん中で×一は片手で斐文を担ぐ。

足を失い、血塗れで意識のない斐文。

×一は張り付けられている神無を遠目で見ながら薄く笑う。

「蛇は足（自由）を奪われ、全てに嫌われる」

黒い装甲片が落下するビルの影。

そこで三つの人影が、神無を見つめる。

「まだ、答えを聞かせてもらってないな」

「このまじや目覚めが悪い」

「この世界を」

三人は思惑を胸に闇の中に消えていった。

「黒い魔人確保、か」

「予定調和っスね」

「ま、捕物としては面白かったわね」

そう言うとアーシヤはエクスマから降りる。

「さ、次のステップに進みましょう」  
「わかってるっすよ」  
「パーティーは、これからよ」

PHOBIA 第四節

Junky Walker

冒流の魔人

Bleive Yourself

了

黒い装甲片が落下するビルの影。  
一つの人影が熱い息を吐きながら胸を掻き巻く。  
「怒りが……怒りが収まらない！」

(続く)

PHOBIAの執筆者『霜月 音闇』です。

これからお見知りおきを。

自己紹介か、そうだなあ。

年齢は30、A型、蠍座の男です。

本体は眼鏡で執筆したりしているのは眼鏡掛け器です。

精神を病み、退職したので今無職です。

MTGを弄るだけの日々なので、映画の卒業のように誰か私をさらってください。

PHOBIAもあと二節。

ここまで付き合っていたことに感謝。

そして、終わりゆく彼らの世界を共に付き合ってください。  
では、これで。